

博 多 172

— 博多遺跡群第 220 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1415 集

2021

福岡市教育委員会

博 多 172

— 博多遺跡群第 220 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1415 集



2021

福岡市教育委員会



SK20・SX21出土陶磁器



SK10出土陶器



SK20出土陶器

序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、ホテル建設に伴い、平成 30 年 5 月から 8 月にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第 220 次調査の成果を報告するものです。遺跡のある博多は中世において対外交渉的一大拠点として大きな役割を果たしました。今回の報告はその交易活動に関わる場とみられる区域の調査で、調査成果は、対外交渉史を解明する上での一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、合同会社 9 をはじめ、関係者の方々とのご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころからの感謝の意を表する次第です。

令和 3 年 3 月 25 日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

例　言

- 1 本書は福岡市教育委員会がホテル建設に伴い、福岡市博多区冷泉町 430 番（地番）で発掘調査を実施した博多遺跡群第 220 次調査の報告である。
- 1 本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

| 調査番号 | 遺跡略号 | 調査対象面積 | 調査面積 | 調査期間 |
|------|---------|--------------------|--------------------|-------------------------|
| 1804 | HKT-220 | 200 m ² | 186 m ² | 2018 年 5 月 8 日～ 8 月 7 日 |

- 1 本書に掲載した遺構の写真撮影は調査担当の佐藤一郎（埋蔵文化財課主任文化財主事）、実測は担当者の他、技能員の藤野雅基が行い、製図は佐藤、資料整理補助職員の島井幸代が行った。
- 1 遺物の写真撮影は佐藤、実測は佐藤、技能員の林田恵三・池田晃子・山本麻里子、製図は島井幸代・林由紀子・萩尾朱美が行った。
- 1 遺物の整理は資料整理補助職員の島井・甲斐田嘉子が行った。
- 1 遺構は 3 枝の通し番号を行い、遺構の種類に応じて SD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）の略号を番号の前につけた。
- 1 本書の中国陶磁器の分類は山本信夫「陶磁器分類編」『大宰府条坊跡 XV』太宰府市の文化財第 49 集 2000 による。
- 1 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 1 本書の執筆、編集は佐藤が行った。

本文目次

| | |
|-----------------|----|
| Iはじめに | 5 |
| 1 調査に至る経緯 | 5 |
| 2 調査の組織 | 5 |
| II 遺跡の位置 | 5 |
| III 調査の記録 | |
| 1 調査の概要 | 7 |
| 2 遺構と遺物 | |
| (1) 遺構 | 7 |
| (2) 遺物 | 10 |
| IV 小結 | 43 |

挿図目次

| | |
|---|----|
| 第1図 博多遺跡群発掘区域図（縮尺 1/8000） | 4 |
| 第2図 博多遺跡群第220次調査発掘地（縮尺 1/1000） | 5 |
| 第3図 博多遺跡群第220次調査遺構配置図（縮尺 1/100） | 6 |
| 第4図 遺構実測図 1（縮尺 1/40） | 8 |
| 第5図 遺構実測図 2（縮尺 1/40） | 9 |
| 第6図 SK01 出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 11 |
| 第7図 SK02 出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 12 |
| 第8図 SK03 出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 13 |
| 第9図 SK03/04 出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 14 |
| 第10図 SE05 出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 15 |
| 第11図 SK06 出土遺物実測図 1（縮尺 1/3） | 16 |
| 第12図 SK06 出土遺物実測図 2（縮尺 1/3） | 17 |
| 第13図 SK07/08 出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 19 |
| 第14図 SK10 出土遺物実測図 1（縮尺 1/3） | 20 |
| 第15図 SK10 出土遺物実測図 2（縮尺 1/3） | 21 |
| 第16図 SK10 出土遺物実測図 3（縮尺 1/3） | 22 |
| 第17図 SK11/12/13/14 出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 23 |
| 第18図 SK15/16/17/18/19 出土遺物実測図（縮尺 1/3） | 24 |
| 第19図 SK20 出土遺物実測図 1（縮尺 1/3） | 26 |
| 第20図 SK20 出土遺物実測図 2（縮尺 1/3） | 27 |
| 第21図 SK20 出土遺物実測図 3（縮尺 1/3） | 28 |
| 第22図 SK20 出土遺物実測図 4（縮尺 1/3） | 29 |
| 第23図 SD22 出土遺物実測図 1（縮尺 1/3） | 30 |
| 第24図 SD22 出土遺物実測図 2（縮尺 1/3） | 31 |
| 第25図 SX21・Pit 出土遺物実測図（縮尺 1/3 1/2） | 32 |
| 第26図 包含層出土遺物実測図 1（縮尺 1/3） | 34 |
| 第27図 包含層出土遺物実測図 2（縮尺 1/3） | 35 |

| | | |
|------|--------------------|----|
| 第28図 | 包含層出土遺物実測図3(縮尺1/3) | 36 |
| 第29図 | 包含層出土遺物実測図4(縮尺1/3) | 37 |
| 第30図 | 包含層出土遺物実測図5(縮尺1/3) | 38 |
| 第31図 | 包含層出土遺物実測図6(縮尺1/3) | 39 |
| 第32図 | 包含層出土遺物実測図7(縮尺1/3) | 40 |
| 第33図 | 包含層出土遺物実測図8(縮尺1/3) | 41 |
| 第34図 | ガラス製品他実測図(縮尺1/1) | 42 |

図版目次

| | | | |
|-----|--------------|--------------|--------------|
| 図版1 | 1.II層上面全景 | 2.SE05 井戸 | 3.SK07 土坑 |
| | 4.SK08 土坑 | 5.SK03 土坑 | |
| 図版2 | 1.SK06 土坑 | 2.SK02 土坑 | 3.SK18 土坑 |
| | 4.SK13 土坑 | 5.SK17 土坑 | 6.SK03 土坑土層 |
| | 7.Pit25 土層 | 8.SK10 土坑 | |
| 図版3 | 1.SE05 井戸土層 | 2.博物館実習生見学 | 3.II層下面全景 |
| | 4.SK20 土坑 | 5.SK12 土坑 | |
| 図版4 | 1.SK01 瓦組土坑 | 2.SD22 ウマ下顎骨 | 3.SD22 シカ肩甲骨 |
| | 4.SD22 ウマ頭蓋骨 | 5.SX21 木棺墓 | 6.II区 |



第1図 博多遺跡群発掘区域図(縮尺1/8000)

Iはじめに

1 調査に至る経緯

2017（平成29）年10月30日、合同会社9から本市に対して博多区冷泉町430番（地番）におけるホテル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書（29-2-680）が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの博多遺跡群の中央やや北寄りに位置する。埋蔵文化財課がこれを受けて申請者と文化財保護に関する協議をもったが、申請面積340m²の内掘削による影響が及ぶ200m²を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は翌2018（平成30）年5月8日から8月7日まで行われた。令和元年度に整理に着手、翌令和2年度に報告することとした。

2 調査の組織

発掘調査委託 合同会社9

発掘調査受託 福岡市

発掘調査（平成30年度）

資料整理（令和元・2年度）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課 福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

課長 大庭 康時

菅波 正人

調査第1係長 吉武 学

吉武 学

事前審査担当 池田 祐司（主任文化財主事） 事前審査担当 田上 勇一郎（主任文化財主事）

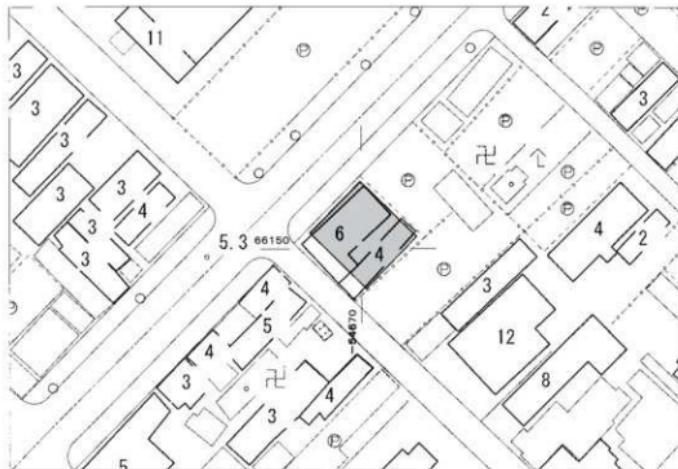
中尾 祐太（文化財主事）

朝岡 俊也・山本晃平（文化財主事）

調査・整理の庶務は文化財活用部文化財活用課の松原加奈枝が行った。また、準備工・施工の安川建設株式会社、地元冷泉町内、発掘作業員、資料整理補助職員の方々のご協力により、博多遺跡群第220次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表する。

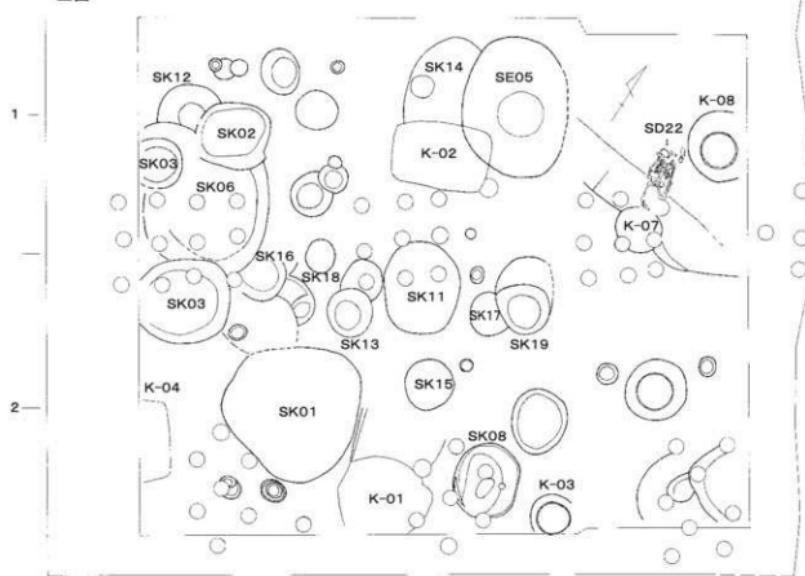
II 遺跡の位置

博多遺跡群は福岡平野の中央、那珂川河口部右岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地する。調査地は古砂丘の中央よりやや北に位置し、地山の標高は2m前後を測り、砂丘の裾部もしくは開析部にあたる。

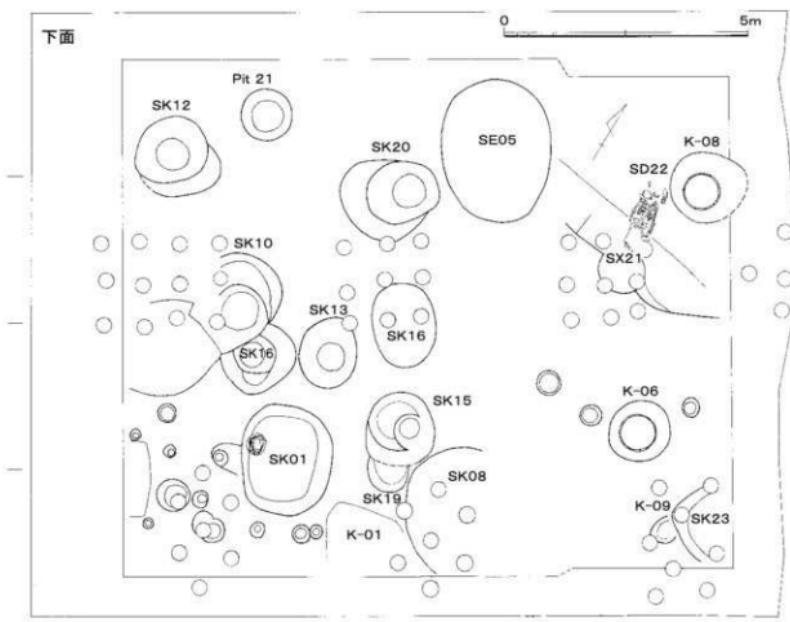


第2図 博多遺跡群第220次調査発掘地（縮尺 1/1000）

上面



下面



第3図 博多遺跡群第220次調査遺構配置図（縮尺 1/100）

III 調査の記録

1 調査の概要

10.5m×12.5m の長方形の調査区は建設工事に先行してH鋼と鋼板で周囲に土留工事が施されている。調査区の長軸は周辺の地割と同じ真北から約45°西に振れている。

既存のビル解体後、建物の基礎等により破壊を受けている現地表から-3mまで鋤取り、遺構検出に当たった。土砂はダンプトラックで外部に搬出し、以降掘下げで生じた残土は調査区内で処理することとした。調査区を長軸で二分、北東側をI区、南西側をII区とし、二分した調査区と残土置き場を工程の半ばに重機で切り返して調査することとなったが、残土置き場として限界に達した。7月中旬から調査区の切り返しのために残土の反転を行ったが、両調査区の境界線付近には未掘の部分が生じた。

残存していた遺物包含層（I層灰褐色砂、II層黄褐色砂一標高2.0m前後）上面で検出した遺構は溝、井戸、土坑、木棺墓で、15世紀末～16世紀前半の土坑1の他は、中世前半（12～14世紀）の遺構が主である。下面では上面での検出漏れの遺構検出にとどまった。土坑の多くは廃棄物処理のためとみられる。遺構や遺物包含層から夥しい量の遺物が出土した。土師器小皿・杯、北宋後半の青磁・白磁碗・皿の他、陶器鉢・盤・壺、獸骨片等が出土している。本調査区は古砂丘の下位に位置し、周辺の調査状況や廃棄物処理坑が多く検出されていることから、居住域からは外れていたと推測される。

2 遺構と遺物

検出遺構

井戸（第4図）

SE05 調査区北西II層上面で検出した。掘り方の平面形は径2.2～2.9mの不整円形を呈し、深さ1.9mを測る。基底中央に径0.9m、深さ2.1mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高0.5mを測る。

土坑（第4・5図）

SK01 調査区南II層上面で検出した。2.3m×1.8mの隅丸方形を呈し、深さ0.25mを測る。方位はN-25°-Eに取る。土師器杯が数点底面から0.25m浮いた状態で出土した。

SK02 調査区西II層上面で検出した。1.5m×1.3mの隅丸方形を呈し、深さ0.3mを測る。須恵器片が底面から0.2m浮いた状態で複数出土した。

SK03 調査区西II層上面で検出した。1.7～1.9mの不整楕円形を呈し、深さ0.6mを測る。

SK06 西端II層上面で検出した。一辺2.4mの隅丸方形を呈し、深さ0.6mを測る。SK02に切られる。

SK12 調査区西II層上面で検出した。径1.9mの不整円形を呈し、深さ0.9mを測る。SK16を切る。

SK13 調査区中央II層上面で検出した。1.2～1.5mの不整円形を呈し、深さ0.45mを測る。

SK13b 調査区中央II層下面で検出した。径0.95mの円形を呈し、深さ1.0mを測る。土師器小皿が底面から0.2m前後浮いた状態で出土した。

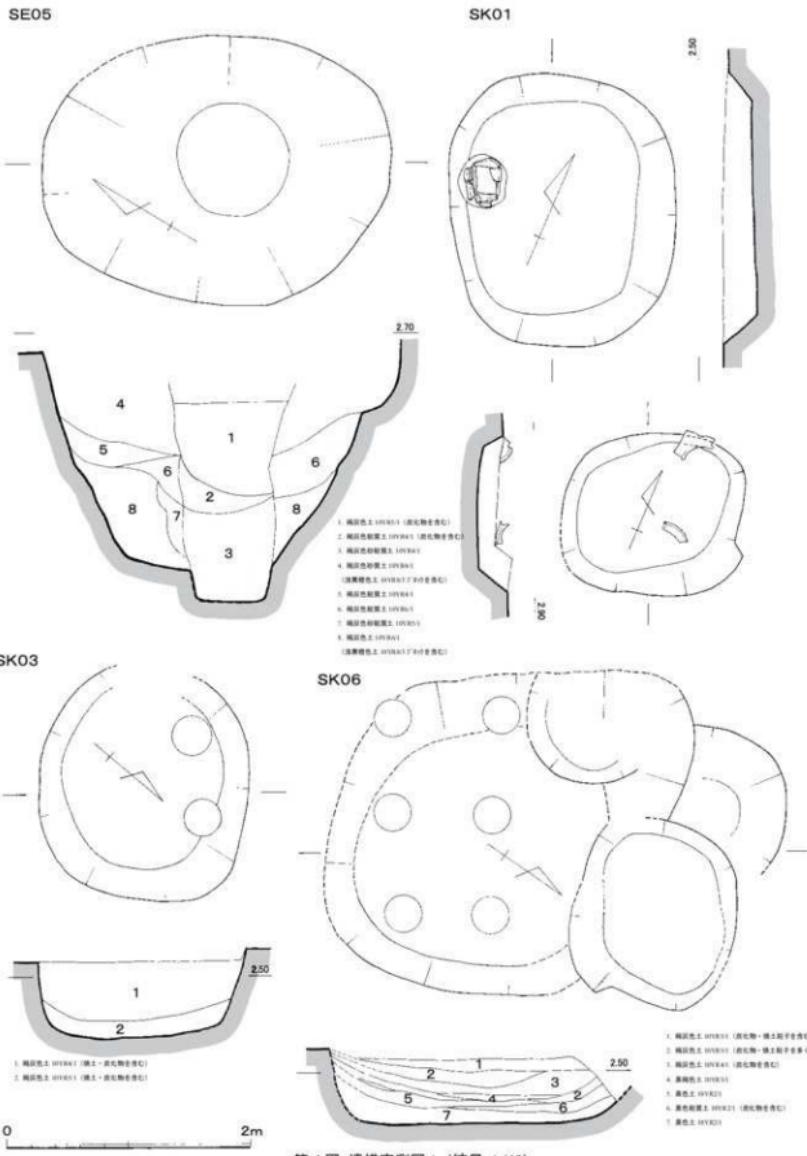
SK15 中央II層上面で検出した。1.4～1.5mの不整円形を呈し、深さ0.7mを測る。SK19を切る。

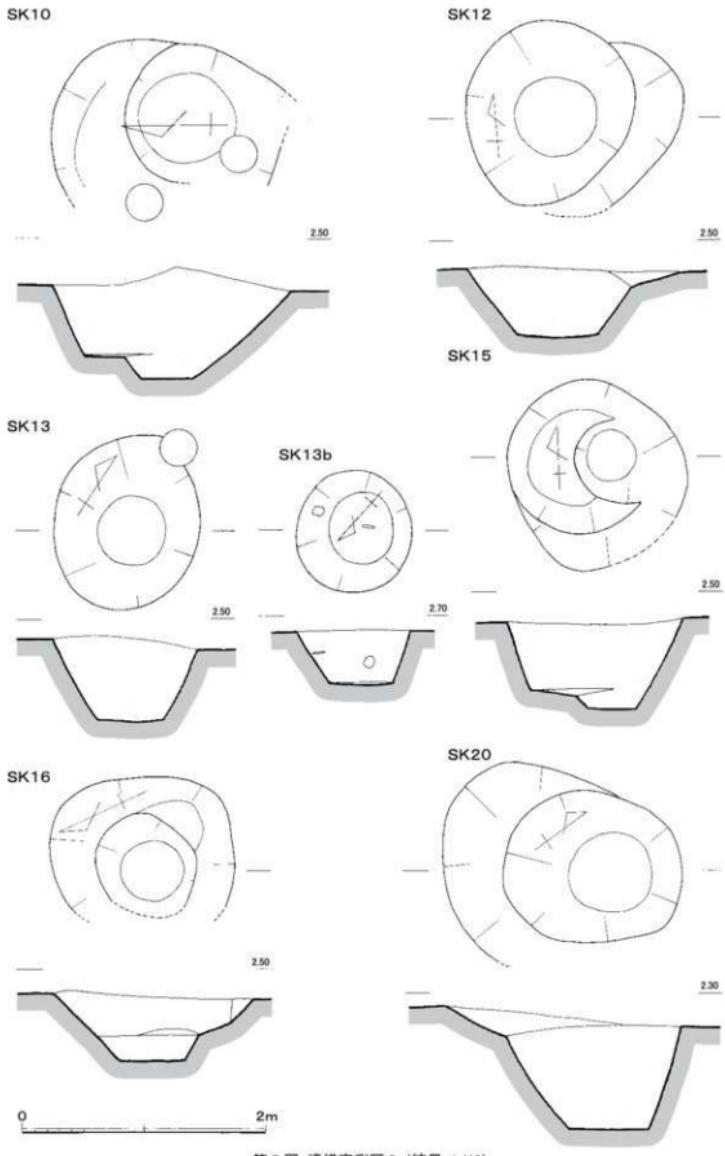
SK16 調査区中央II層下面で検出した。1.5mの隅丸方形を呈し、深さ0.5mを測る。

SK20 調査区中央北西II層下面で検出した。1.7～1.9mの不整楕円形を呈し、深さ0.8mを測る。

SX21 北端で検出した木棺墓で、人骨、棺材立ての鉄釘3が残存し、頭部左上面では供獻の龍泉窯系青磁碗・土師器小皿が出土した。下面検出のSD22埋没の過程で置かれた可能性が考えられる。

SD22 北端で検出の落ち込み、東西溝の南岸か。検出面からの深さ1.2m、底面の標高1.1mを測る。





第5図 遺構実測図2 (縮尺 1/40)

出土遺物

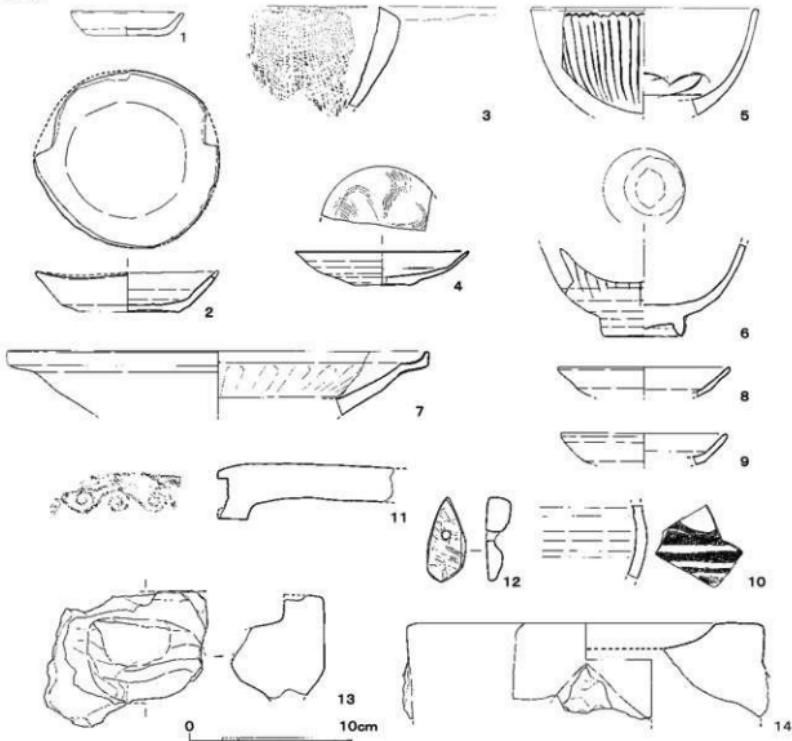
SK01 出土遺物（第6図）土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。1は特小皿、口径 6.9cm、器高 1.4cm を測る。2は杯、口径 11.3cm、器高 2.9cm を測る。口縁部をヘラで削り取った部分がみられる。3は製塙土器口縁部片で、外面は不定方向のナデ、内面には粗い布目痕が残る。4は青白磁 皿、内面に櫛目文を施す。5・6は青磁 碗、外面に細蓮弁をヘラ彫りする。7は内面に圓弁をヘラ彫りする盤である。8・9は朝鮮雜釉陶器皿、10は象嵌粉青沙器瓶で、徳利形瓶の体部下位か。11は軒平瓦で、瓦当の中心より右半部は欠失、左に3回反転する唐草文を配する。12は滑石製品、13は瓦質土器火鉢脚部、14は茶臼上石片である。

SK02 出土遺物（第7図）土師器 1・2は小皿、底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径 8.5・9.5cm、器高 1.1・1.2cm を測る。3は瓦器 植、丸みをもつ体部中位で屈曲し、外面ともヘラ磨きを施す。4は小さい玉縁口縁、内底に段ではなく、高台は外面を直、内面を斜めに削り出す。白磁 碗 II-1、5は丸みをもつ体部から外反する口縁部が延びる小碗で、体部外面に櫛目文を施す。6は内面に蕉葉文をヘラ描きする皿 VI-2・b である。7は小皿、8は高麗青磁 小碗、9は越州窯系青磁 碗底部片で内面に花弁文をヘラ描きする。陶器（10～14）10は長沙窯黄釉褐彩水注体部の貼花葡萄文の一部である。11はこね鉢、12は四耳壺、13は壺蓋、14は無釉の甌で、口縁端部下は強くなられ稜をなす。

SK03 出土遺物（第8・9図）土師器 小皿・杯の底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。1～5は小皿、口径 9.0～9.6cm、器高 0.9～1.1cm を測る。6～12は杯、口径 15.0～15.8cm、器高 2.6～3.0cm を測る。13～15は墨書を記す底部片で、判読不明である。16は丸底杯、底部はヘラ切り離し、板状圧痕・墨痕が残る。体部外面は回転横ナデ、内面はコテ当てにより平滑に仕上げられている。口径 14.6cm、器高 3.2cm を測る。18～25は白磁 碗、19・20は玉縁状口縁で、内面の体部と底部の境に沈園線が付くIV-1・a で、20 の外底には墨書「僧」を記す。17は丸みをもつ体部から外反する口縁部が延びるV-2・a、22～24は口縁端部を水平にし、内面に櫛目文を施すV-4・b で、24 の外底に墨書を記す。25は見込みの釉を輪状に掻き取ったVII類の底部片で、外底に墨書を記す。26～30は皿で、26は見込みの釉を輪掻ぎするIII類、27～29は内底見込みにヘラ描き文を施すVII類で、27・28 の外底には墨書を記す。30は内底が平坦なVII類である。青磁 碗 口縁部片で、27は外面にヘラで条線を入れ、内面にヘラ描き文と櫛による文様を施す。32・33は内面に蓮華折枝文を片彫りする龍泉窯系 I-2 である。34は陶器 小皿口縁部片、上端部が欠失し、直下に回線を入れる。

SK04 出土遺物（第9図） 1は青白磁 碗、内底見込みに回線をめぐらす底部片で、外底に墨書「楊口」を記す。6は型作りで体部外面に花弁を施す合子の身部で、蓋受け部分は露胎となっている。青磁 碗、2～4は龍泉窯系の底部片で、2は内外面とも無文のI-1で、外底に墨書「口丸」を記す。3・4は体部内面に蓮華切枝文、内底見込みに花文を片切り彫りするI-2、5は同安窯系碗 I-1・b 底部片で、体部外面に櫛による条線、内面にはヘラ・櫛による施文を施す。瓦質土器 蓋（7）天井部が平坦で、口縁端部は丸く肥厚する。陶器 7は甌の蓋で、天井部に灰オリーブ色の釉を掛け、胎土は緻密で、にぶい赤褐色を呈する。堅敏に焼成される。9は注口・把手が欠失しているが、急須の一部である。10はすり鉢 II-1a で、口縁部を折り返し直立させ、口縁端部は水平にする。

SE05 出土遺物（第10図）土師器 特小皿・小皿・杯の底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。1は特小皿、口径 8.1cm、器高 2.1cm を測る。口縁部には煤が付着している。2は小皿、口径 9.8cm、器高 1.1cm を測る。3～7は杯、口径 11.9～13.2cm、器高 2.4～2.8cm を測る。8は外底に墨書を記す底部片。9は丸底杯、底部はヘラ切り離し、板状圧痕・墨痕が残る。

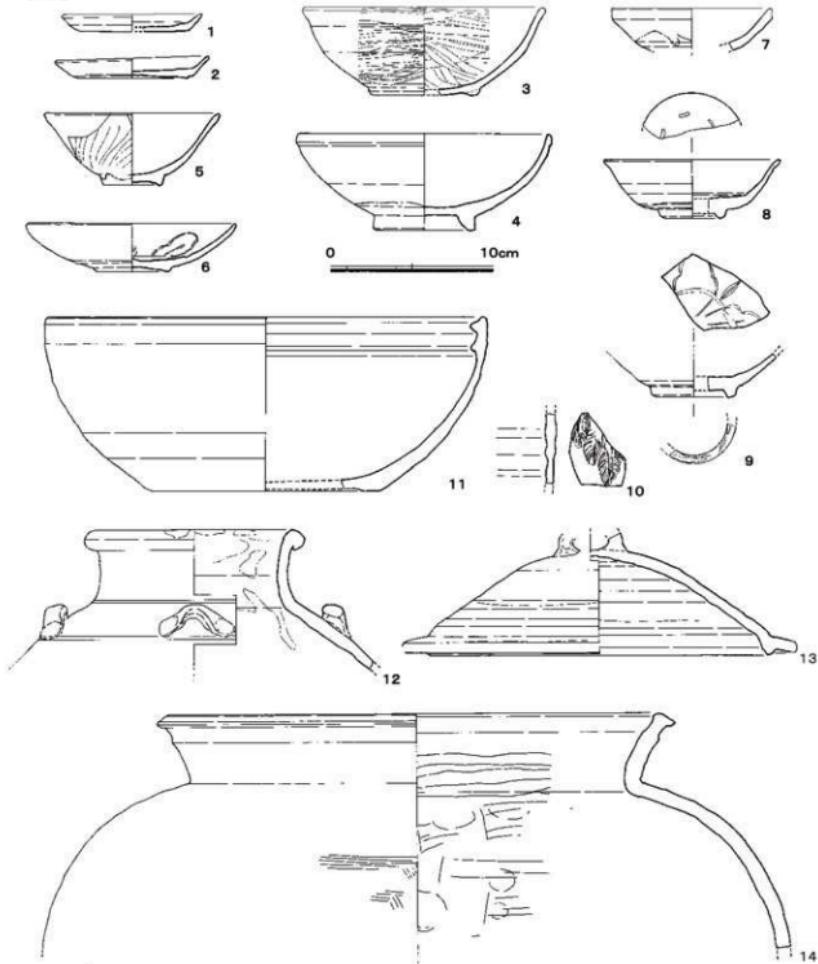


第6図 SK01出土遺物実測図（縮尺 1/3）

体部外面は回転横ナデ、内面はコテ当てにより平滑に仕上げる。口径 15.1cm、器高 3.1cm を測る。10 は高台を貼り付けた瓦器碗底部片で、内面はヘラ磨き、外面は回転横ナデを施す。11・12 は全長 6.5cm、最大径 3.3～3.6cm を測る管状土錐である。13 は青白磁 碗、高台は細く高いが内側の削りが高台の 1/3 程度で、底部が厚くなる。内底にはヘラ・櫛状工具を用いて施文を施す。14 は型作りで口縁部外面に花弁を施す合子蓋、図 15 は高麗陶器 壺、口縁部を外に折り曲げ、上端部を僅か上方へつまみ出し、側縁端をくぼませる。16・17 は陶器 壺、18 は白磁 壺で、口縁部を鋭角に折り曲げる。19 は土師器 足鍋の三足の内一足の付け根部分で、接合部はハケ目後の指頭圧痕が残る。20・21 は平瓦で、20 の凸面は格子目叩き、凹面には布目、21 は桶巻作りによるもので、凸面は繩目叩き、凹面には布目、側縁には分割した際の内側からの切込み痕と破面が残る。22 は壇で、表面はナデ調整がなされ、長さ 14.5cm、残存幅 7.0cm、厚さ 3.3cm を測る。

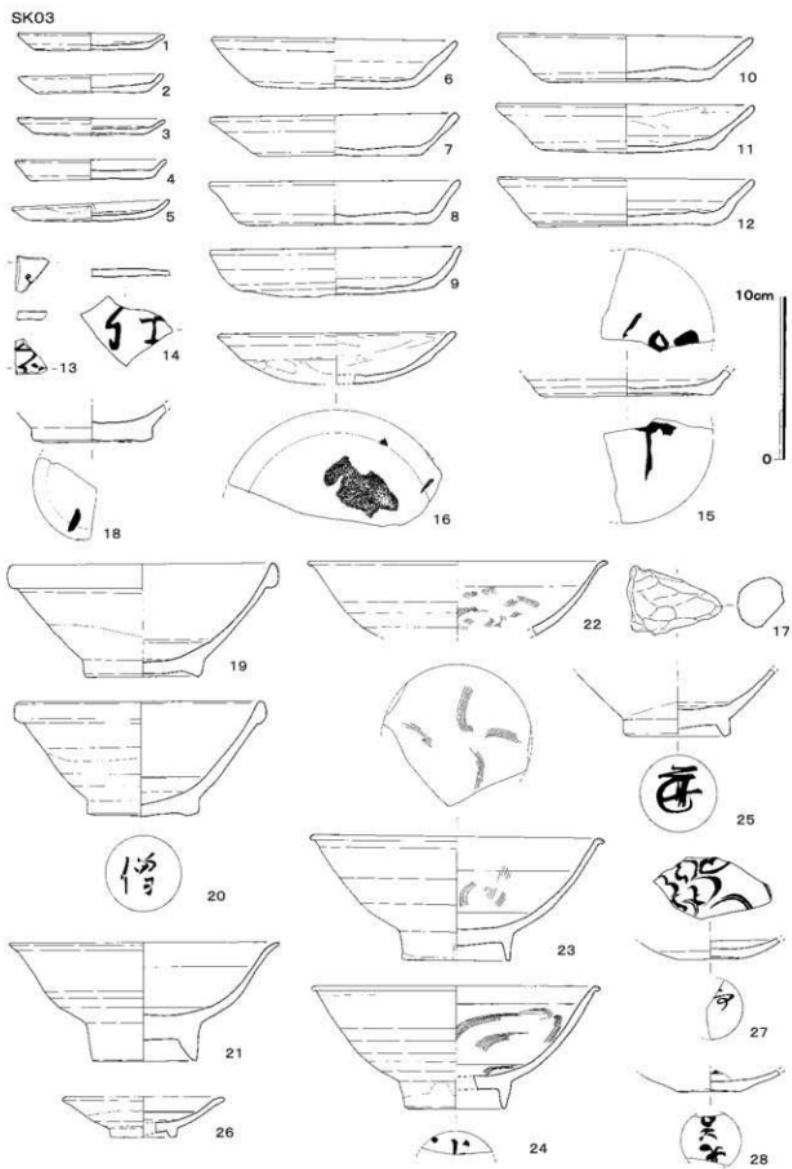
SK06 出土遺物（第 11・12 図）土師器 体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。1～28 は小皿、1～19 の底部切り離しは糸により、口径 8.3～9.3m、器高 1.0～1.4cm を測る。20～28 の切り離しはヘラにより、口径 9.3～10.0cm、器高 1.1～1.6cm を測る。29～36 は杯、29～34 の底部切り離しは糸により、口径 14.8～16.0m、器高 2.5～2.9cm を測る。35・36 の切り離しはヘラにより、口

SK02

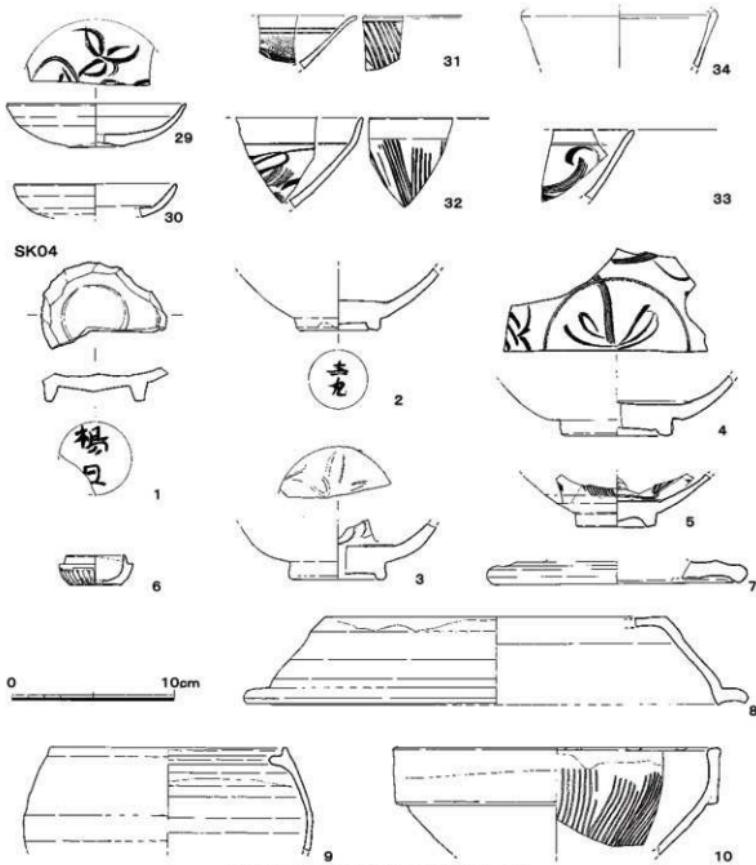


第7図 SK02出土遺物実測図（縮尺 1/3）

径 15.0・15.7cm、器高 3.2~2.7cm を測る。37 は外底に墨書を記す糸切りの底部片である。38 は丸底杯で、底部はヘラ切り離し、板状圧痕・墨痕が残る。体部外面は回転横ナデ、内面はコテ当てにより平滑に仕上げられる。口径 15.3cm、器高 3.7cm を測る。39 は碗で、口縁端部が外反し、底部は欠失する。外面はヘラ磨き、内面はコテ当てにより平滑に仕上げられる。40・41 は瓦器 瓶、外面は体部がヘラ磨き、下半には成型時の指頭圧痕が残り、外に開く高台を貼り付けた底部は回転横ナデを施す。

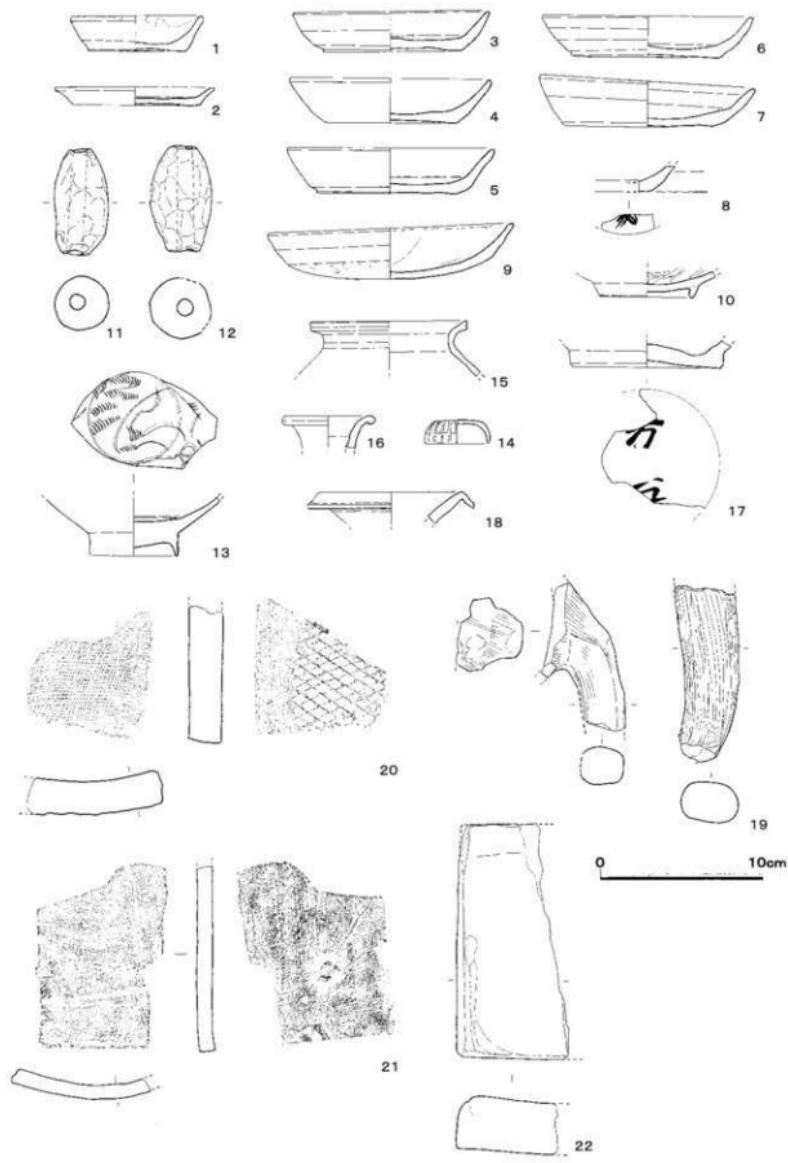


第8図 SK03出土遺物実測図（縮尺 1/3）



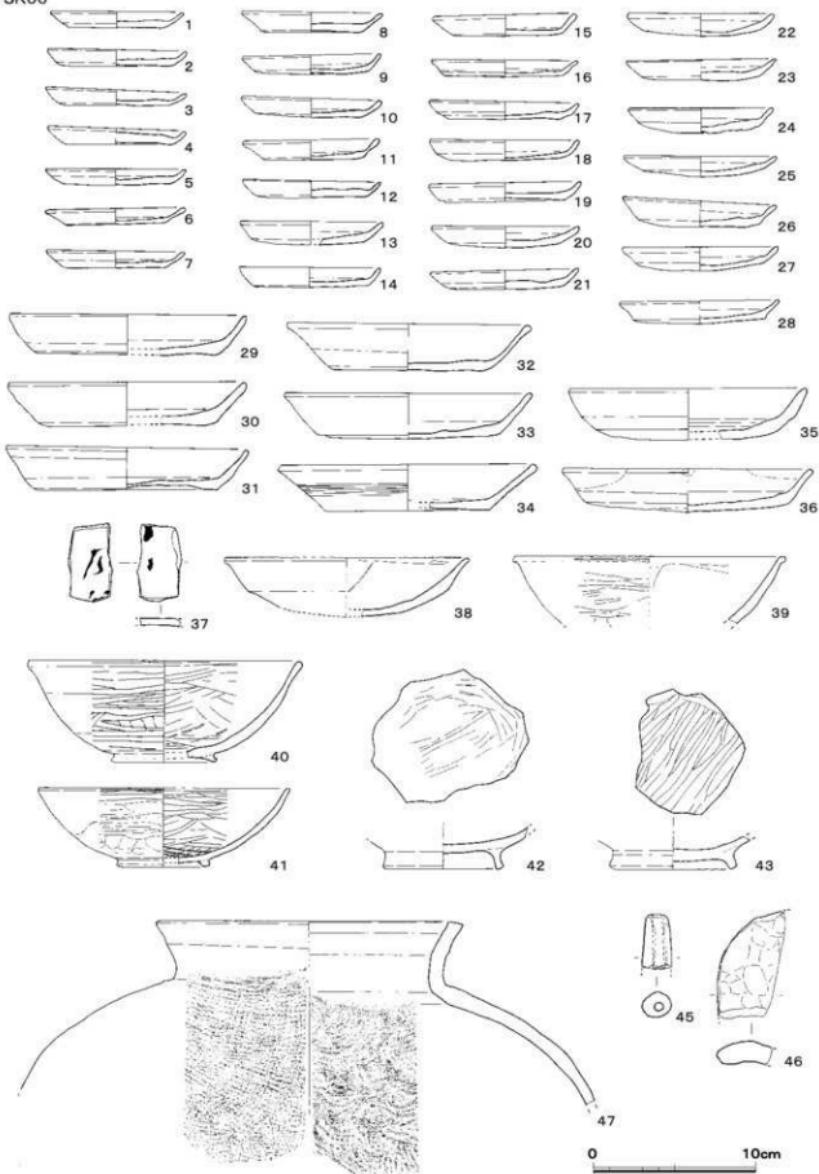
第9図 SK03/04出土遺物実測図（縮尺 1/3）

40は成形時に41の口縁部外面には横ナデ痕が残る。42・43は黒色土器 椽底部片で、内面はヘラ磨き、外面は回転横ナデを施す。高台はやや高く外に開く。45は半分が欠失し、最大径1.8cmを測る管状土錐である。46は指押さえにより成形された円盤状土製品の一部で、厚さ1.2cmを測る。47は高麗陶器 壺、口縁部端部は外に傾き、内側を僅か内上方へつまみ出す。体部外面に格子目叩き、内面に同心円の当て具痕が残る。白磁48～51は碗、48はやや内湾した直口縁、内底見込に沈線状の段が付くII-4aで、体部内面に横目文を施す。49はVI-1a、50・51はV-4・b、52は小碗VI-1・b、53～56は皿、53はII-1・a、54はIV-1・aで外底に墨書きを記す。55・56はVI-1・aである。57は青白磁 皿、口縁部を輪花にし、堆線で体部内面を分割する。青磁58・59は碗、58は体部外面にヘラで条線を入れ、内面にはヘラと櫛で文様を施す同安窯系III-1・c、59は体部外面にヘラで条線を入れ、内面にヘラ書き文と櫛による刺突文を施す。高台内側の削り出しあは浅い。60は鉢で、丸みをもつ体部から口縁部まで外上方に延び

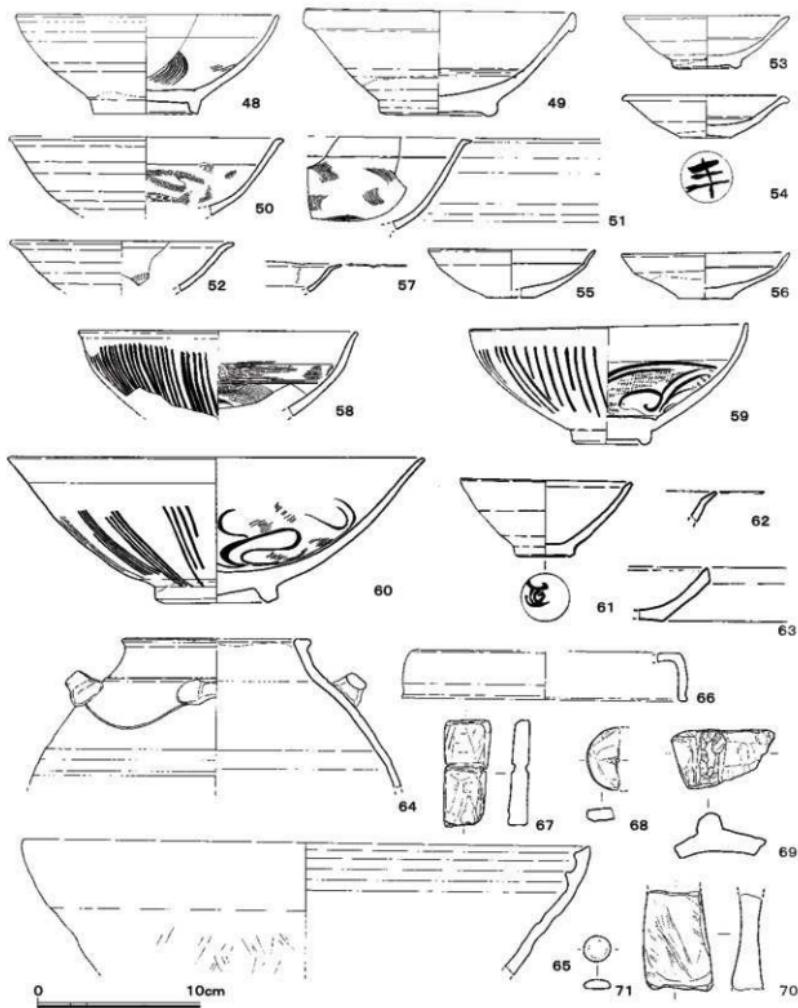


第10図 SE05出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

SK06



第11図 SK06出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)



第12図 SK06出土遺物実測図2 (縮尺 1/3)

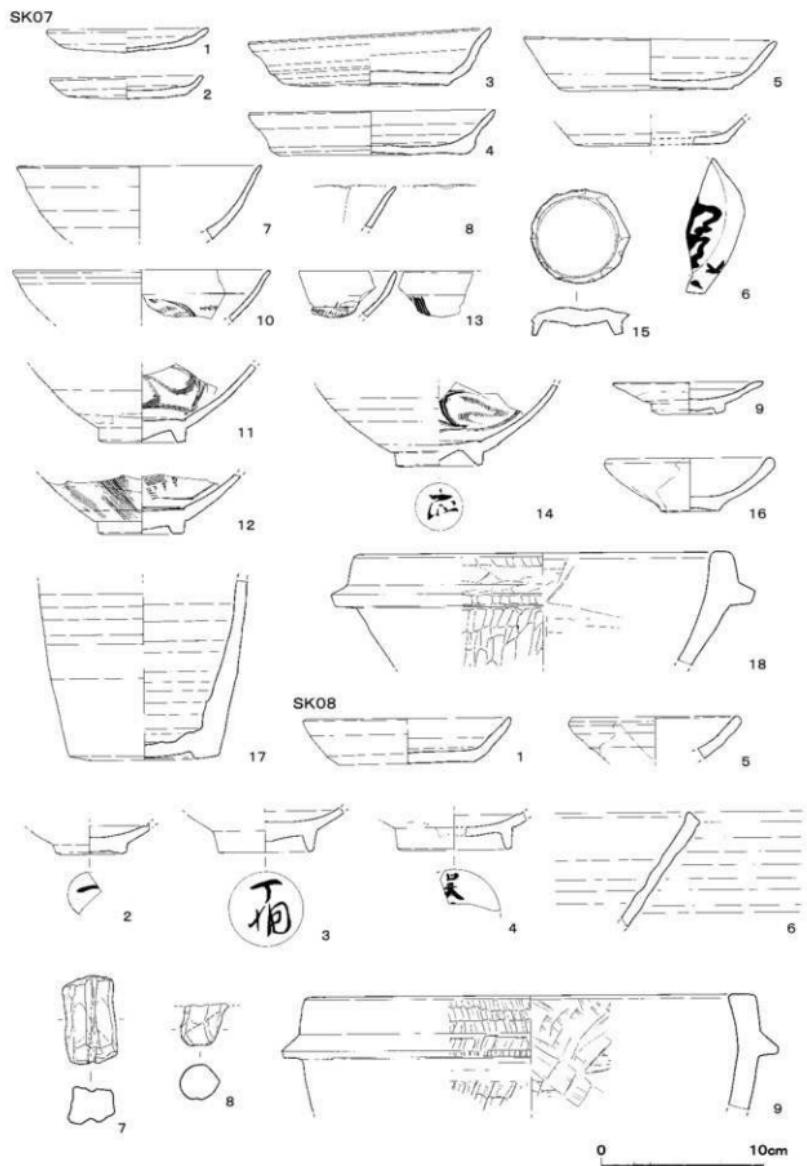
る。外面にヘラで条線、内面にはヘラと櫛で文様を施す。陶器 61・62は碗、61は黒釉陶器（天目）椀で、外底に墨書が記される。63は小皿である。64は四耳壺、頸部と体部の境は不明瞭である。境に凸線をめぐらせ、凸線下に横耳、波状凹線を配する。65はこね鉢、口縁端部は内傾し、内面口縁下を強くなで、突帯をめぐらす。体部下半は焼き歪み、本来の丸みがない。66は須恵器 葉巻形の短頸壺の蓋である。滑石製品 67は石錘で、長さ 5.5cm、幅 2.5cm、厚さ 1.1cm の板状をなし、長軸と直行し

て四周に溝状の切り込みをめぐらす。68は径4.0cm、厚さ0.7cmの円盤状をなし、中心に孔を穿つ。紡錘車か。69は縦耳が付く小型の石鍋口縁部片、70は砥石、71は直径1.5cm前後のタブレット状の白色ガラス製品、双六の駒、双六子か。

SK07出土遺物（第13図）土師器 体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。1・2は小皿、1の底部切り離しはヘラにより、口径10.0cm、器高1.4cmを測る。2の切り離しは糸により、口径9.5cm、器高1.4cmを測る。3～6は杯、底部切り離しは糸により、3～5は口径14.8～15.5cm、器高2.7～3.1cmを測る。6は外底に墨書を記す糸切りの底部片である。白磁7・8は碗、7はV-I、8は口縁部を輪花にし、堆線で体部内面を分割する。9は皿III類で、見込みの輪刺ぎはない。10～15は同安窯系青磁碗、10～14は体部内面にヘラによる簡略化した花文と柳による「之」字形点綴文を入れる。10・11・14は体部外面無文の碗I-1-a、12・13は体部外面に柳による条線を入れる碗I-1-bである。14の外底には墨書を記すが、判読不明である。15は体部と底部の境を打ち欠き瓦玉状にした底部片である。陶器16は小皿、17は長瓶の下段である。18は滑石製石鍋、羽釜形を呈し、体部は下に窄まる。

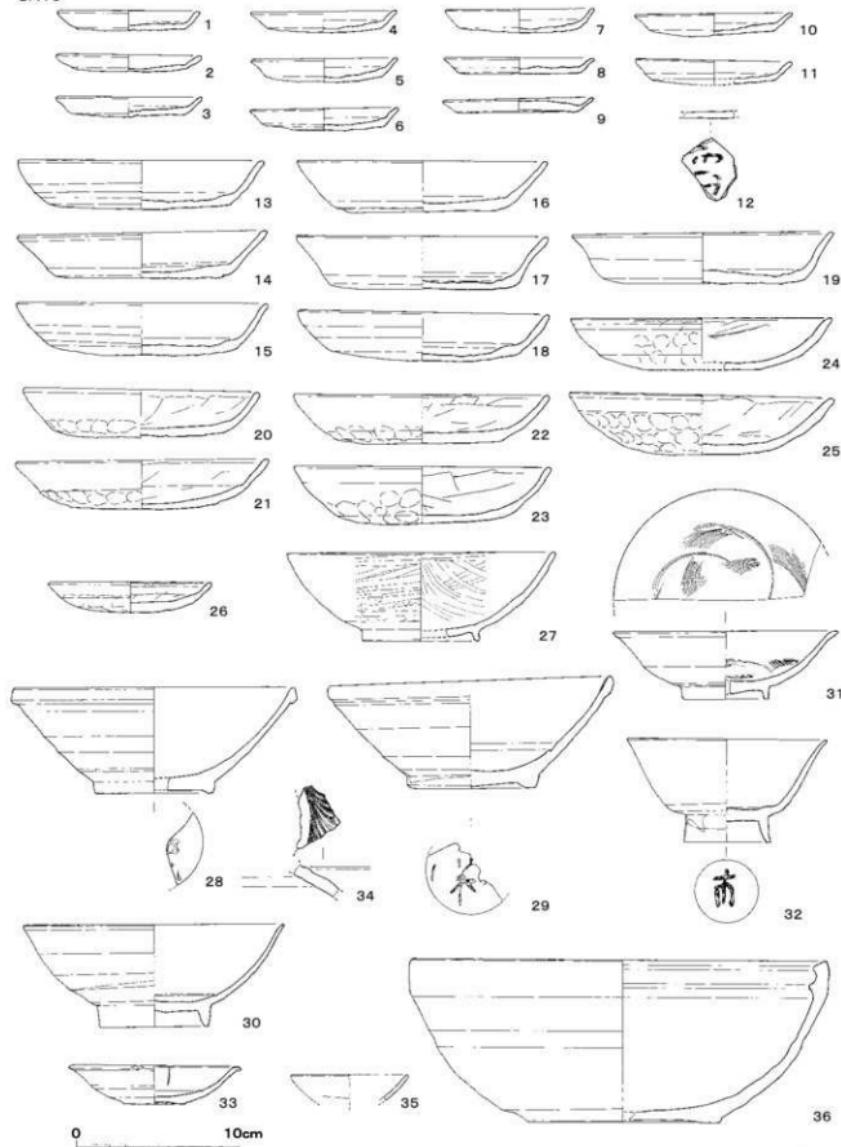
SK08出土遺物（第13図）1は土師器 杯、底部は糸切り、体部外面から内底まで回転横ナデ、外底には板状圧痕はない。口径12.8cm、器高2.8cmを測る。2～4は白磁、内面の体部との境に沈圧線が付く底部片で、皿II類の2は「一」、碗V類の3は「丁綱」、同4は「吳口」と外底に墨書を記す。5は陶器 小皿、6は須恵器 こね鉢、口縁端部の両端がやや拡張する。7は土鍤で、端部が欠失する。残存長5.5cm、幅3.0cm、厚さ2.4cmの棒状を呈し、表裏には長軸に沿って溝状の切り込みを入れる。8は器形不明の瓦質土器脚部で、付け根部分は剥離し、接地部は平坦に成形される。9は滑石製石鍋、外面口縁下に鍔が付き、口縁部はやや内湾し、体部から直立する。**和鏡** 八稜鏡片（第25図17）。

SK10出土遺物（第14～16図）土師器 小皿・杯の体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。1～12は小皿、1・2・9の底部切り離しは糸、それ以外はヘラによる。口径8.8～9.6cm、器高0.9～1.5cmを測る。12は外底に墨書を記す糸切りの底部片である。13～19は杯、14・17の底部切り離しは糸、それ以外はヘラによる。口径15.1～16.0cm、器高2.7～3.5cmを測る。20～25は丸底杯、22の底部は糸切り離し、それ以外はヘラによる。板状圧痕が残る。体部外面上半は回転横ナデ、下半には指頭圧痕が残る。内面はコテ当てにより平滑に仕上げる。口径14.5～16.1cm、器高2.9～3.7cmを測る。瓦器26は小皿で、底部は糸切り離し、外底には板状圧痕が残る。体部外面上半は回転横ナデ、下半から底部の外にかけて指頭圧痕が残る。内面はヘラ磨きを施し、所々にヘラ磨き前のコテ当て痕が残る。27は椀で、内面はヘラ磨きを施す。外面は体部がヘラ磨き、下半には成形時の指頭圧痕が残り、高台を貼り付けた底部は回転横ナデを施す。白磁28～30は碗、玉縁状口縁の29は内面の体部と底部の境に沈圧線が付くIV-Iaで、28には沈圧線はない。いずれも外底に墨書を記すが、判読不明である。30はV-Iである。31は高台付皿VI-I-b、32は小碗で、外底に墨書が記される。SK20から出土した破片と接合した。33は皿IV-2-b、34は凸線をめぐらせ、その下に羽状の刻線をめぐらせる四耳壺肩部の破片である。陶器35は黒釉小碗口縁部片、36はこね鉢、37・38は縦耳が付く四耳壺VII類である。39は滑石製石鍋、口縁部はやや内湾し、体部から直に立ち上がる。縦耳が4カ所に付く。40は復元径8.0cm、片面が剥離し残存する厚さ0.8cm円盤状石製品で、中心に穿孔があり、紡錘車か。須恵器41は杯蓋、口縁端部は断面三角形に近く、天井部は回転ヘラ削り、扁平な撮みが付く。42は高台をもつ杯、43は皿である。44～46は移動式竈焼き口周囲に付く鍔の破片で、火を受けた部分は煤が付着、或いは暗灰色を呈している。47は上下端が欠失し、残存長4.3cm、幅3.6cm、厚さ0.8cmの板状を呈する土製品である。48は平瓦、凸面は格子目叩き、凹面には布目痕が残る。49は卵形の石鍤で、上部に孔を穿つ。全長13.8cm、最大径6.3cmを測る。50・51は管状土鍤である。



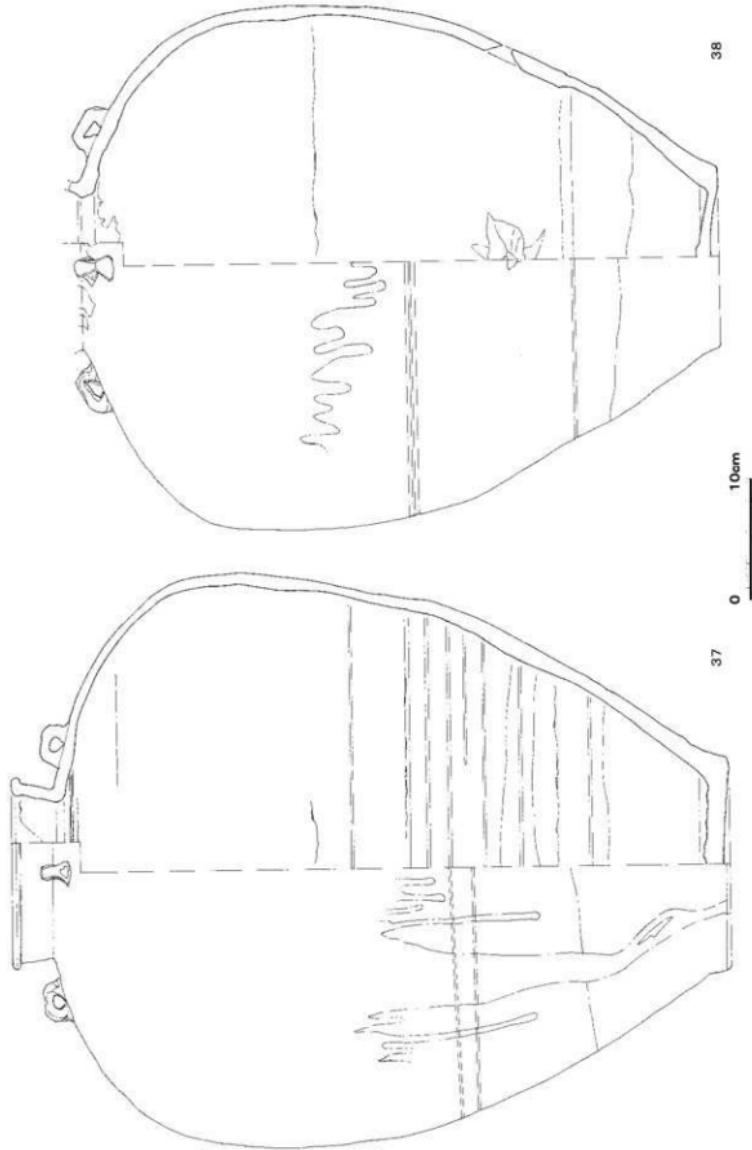
第13図 SK07/08出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

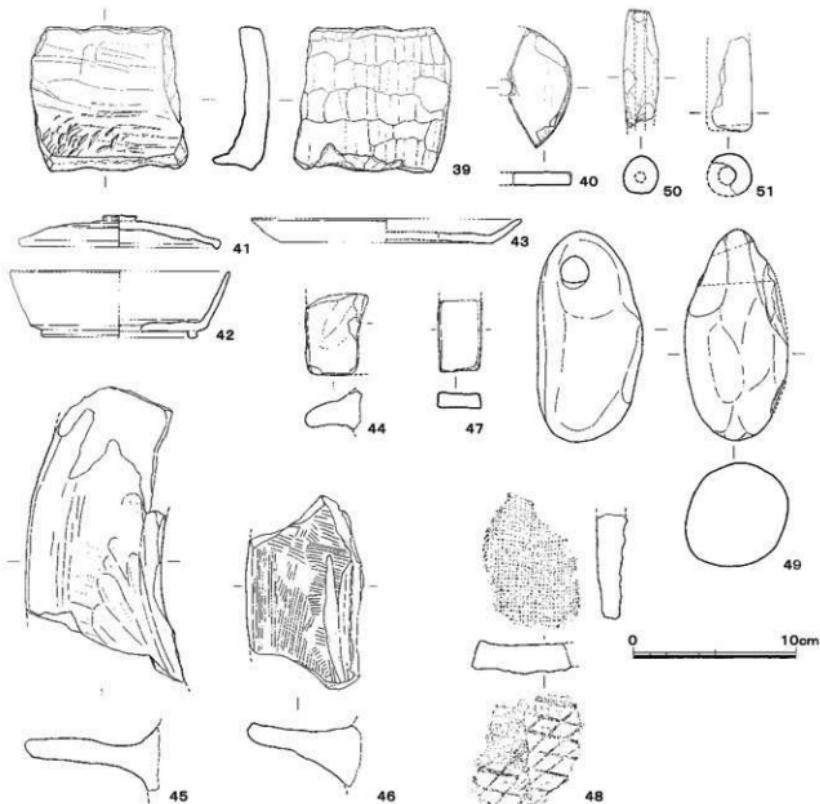
SK10



第14図 SK10出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)

第15图 SK10出土遗物素描图2 (缩尺 1/3)



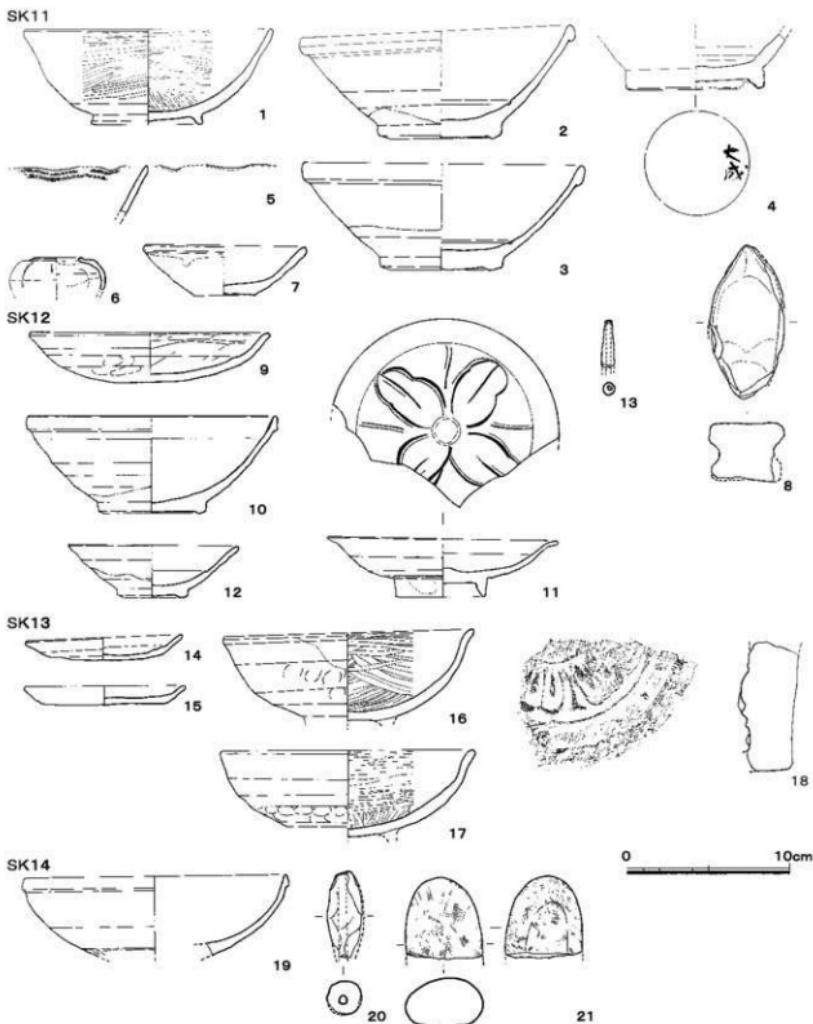


第16図 SK10出土遺物実測図3 (縮尺 1/3)

SK11 出土遺物 (第17図) 1は土師器 梗、内面から体部外面にかけてヘラ磨き、下半には成型時の指頭圧痕が残り、高台を貼り付けた底部は回転横ナデを施す。白磁 2・3は梗IV-1aである。4は水注底部片で、高台内側まで施釉される。外底に墨書「大成」を記す。5は口縁部を輪花にし、それに沿って二重の沈線を施す龍泉窯系青磁 梗 I-4・bである。6は口縁端部を僅かに上方につまみ出し、体部は縱方向に切れ目を入れ瓜形にする青白磁小壺、7は陶器小皿である。8は滑車形の有溝土鍤で、全長9.4cm、幅4.6cm、厚さ3.6cmを測る。

SK12 出土遺物 (第17図) 土師器 9は丸底杯、底部はヘラ切り離し、板状圧痕が残る。体部外面上半は回転横ナデ、下半には指頭圧痕が残る。内面はコテ当てにより平滑に仕上げられる。口径14.8cm、器高3.1cmを測る。白磁 10は内底に沈圈線がない碗IV類、11は内面に花文をヘラ描きする高台付皿、12は皿II-1-aである。13は残存長2.7cm、最大径0.7cmを測る管状土鍤である。

SK13 出土遺物 (第17図) 14・15は土師器 小皿で、底部の切り離しは14がヘラ、15は糸による。体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径9.6・10.0cm、器高1.4・1.2cmを測る。16・17は黒色土器 梗で、内面から体部外面にかけてヘラ磨き、下に指頭圧痕が残る。高台は剥離

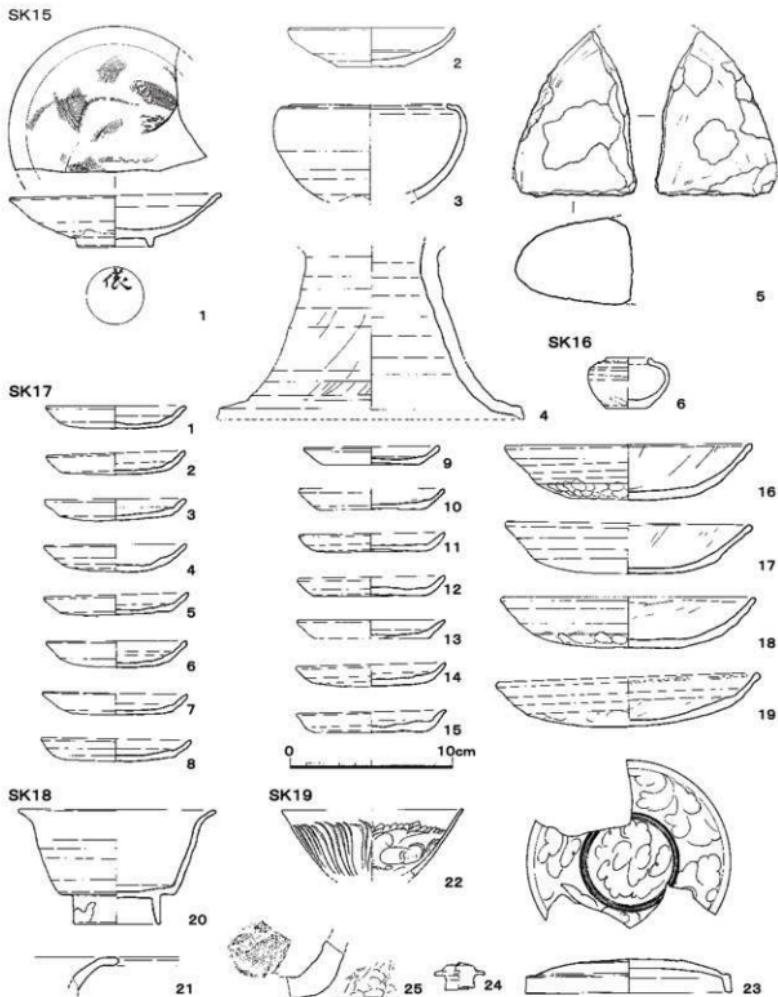


第17図 SK11/12/13/14出土遺物実測図（縮尺 1/3）

し欠失する。18は鴻臚館式軒丸瓦で、瓦当が1/3残存する。

SK14 出土遺物（第17図）19は白磁 瓢II-1で、底部は欠失する。20は残存長5.3cm、最大径2.1cmを測る管状土錐である。21は磨り石である。

SK15 出土遺物（第18図）白磁 1は高台付皿VI-1-bで、外底に墨書きを記す。2は皿VI-1-bである。3は鉄鉢形の陶器 壺である。



第18図 SK15/16/17/18/19出土遺物実測図（縮尺 1/3）

4は須恵器 高杯脚部、下位はラッパ状に開き、端部を僅かにつまみ出す。5は砥石である。

SK16 出土遺物（第18図）6は青白磁 小壺で、口縁端部を僅かに上方につまみ出す。

SK17 出土遺物（第18図）土師器 1～15は小皿、底部の切り離しは1～8がヘラ、9～15は糸による。体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。1～8が口径 8.6～9.2cm、器高 1.2～1.7cm、9～15は口径 8.3～9.2cm、器高 1.1～1.3cm を測る。16～19は丸底杯、底部はヘラ切り、板状圧痕が残る。体部外面上半は回転横ナデ、下半には指頭圧痕が残る。内面はコテで平滑に仕上げる。

口径 15.1～16.2cm、器高 3.0～3.4cm を測る。

SK18 出土遺物 (第 18 図) 20 は直線的に外上方に延びる部から口縁部が大きく外反して開く白磁碗で、底部との境は棱をなし、底部の内側に細く高い高台を削り出す。21 は陶器盤の口縁部片である。

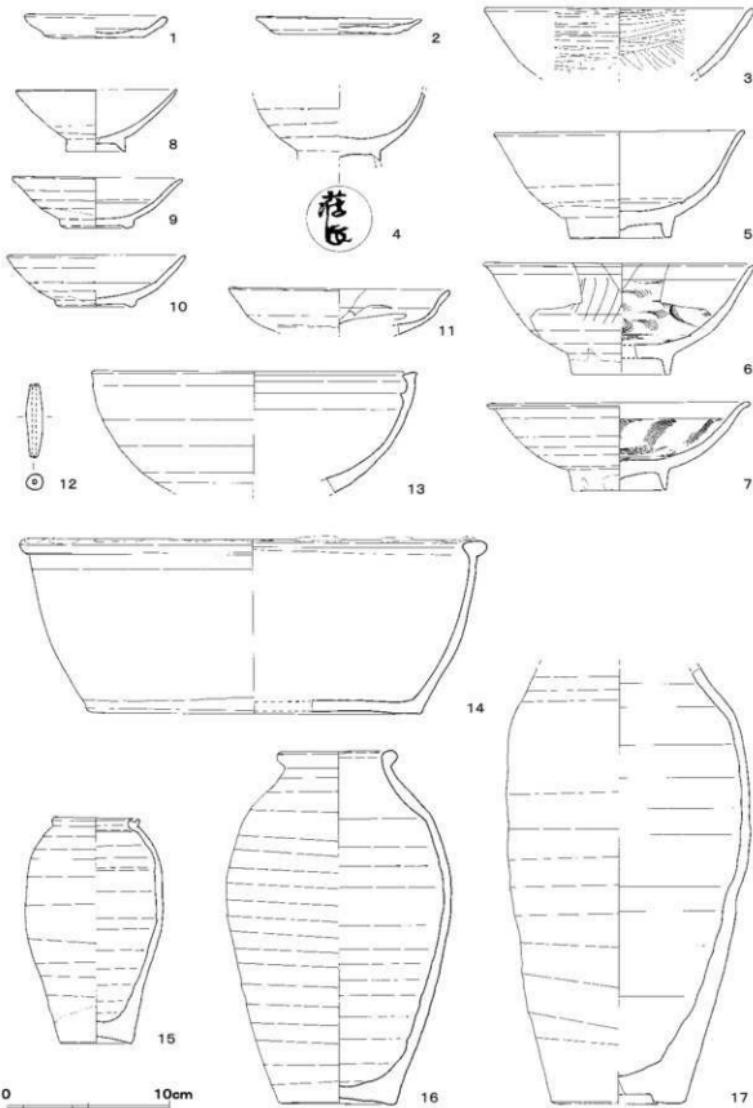
SK19 出土遺物 (第 18 図) 22 は青白磁 小碗、器肉が薄く、体部外面に条線、内面に宝相華文を片切り彫りする。23 は白磁 合子蓋、天井部に花文をヘラ彫きする。24 は青白磁 小壺蓋である。25・26 は焼塙壺片で、内面に布目、外面には指頭圧痕が残る。

SK20 出土遺物 (第 19～22 図) 1・2 は土師器 小皿、底部はヘラ切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径 8.8・10.1cm、器高 1.4・1.0cm を測る。3 は瓦器 梗、内面はヘラ磨きを施す。外面は体部がヘラ磨き、下半には指頭圧痕が残る。底部は欠失している。白磁 4～6 は碗、4 は口縁部・高台が欠失している。体部は丸みをもち、外底に墨書「莊口」を記す。5 が V-1、6 が V-1-b、7 は高台付皿 VI-1-b である。8 は小碗、体部は直点的に外上方に延び、高台は外面を直、内面を斜めに削り出す。9～11 は皿、9・10 が II-1a、11 は VIII-2-a である。12 は全長 5.5cm、最大径 1.0cm の管状土鍤である。陶器 (13～31) 13～30 は中国陶器で、13 はこね鉢、14 は盤、15～17 は長瓶で、15・16 は上げ底状、17 は外底の内側を削り基筒底状をなす。四耳壺 (18～30) 18～21 は小型で、18 の外底には墨書が記されている。22～27 は中型、28～30 は大型で、29 は縦耳を貼り付けける XII 類である。31 は無釉の高麗陶器 売底部、32 は須恵器 売である。

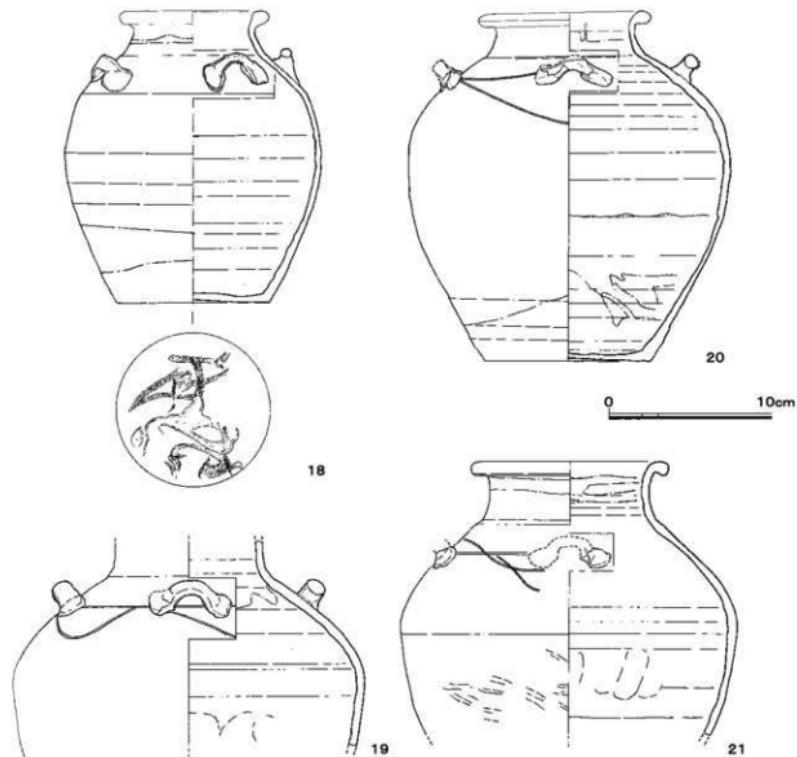
SD22 出土遺物 (第 23・24 図) 1～4 は土師器 小皿、底部はヘラ切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径 9.1～10.0cm、器高 1.2～1.5cm を測る。4 は底部内外面に墨書が記される。5～8 丸底杯、底部はヘラ切り、板状圧痕が残る。体部外面上半は回転横ナデ、下半には指頭圧痕が残る。内面はコテ当てにより平滑に仕上げられる。口径 14.6～16.5cm、器高 3.5～4.3cm を測る。12 は梗、底部が欠失し、内外面ともヘラ磨きを施す。瓦器 9 は小皿で、底部はヘラ切り離し、体部外面から内面にかけてヘラ磨きを施す。10・11 は梗で、体部中位で屈曲し稜をなす。体部外面から内面にかけてヘラ磨きを施し、高台を貼り付けた底部は回転横ナデを施す。10 は底部、11 は口縁部が欠失する。13 は須恵器 梗底部片、底部は糸切り、体部外面と内面は回転横ナデされる。白磁 14～18 は碗、玉縁状口縁 14 の内底に沈圓線はなく、同 15・16 は沈圓線が付く IV-1a である。16 は口縁部が欠失し、外底に墨書「綱口」が記される。17 は丸みをもつ体部の上位で屈曲し、外反する口縁部が付く。体部外面はヘラで条線を片彫りする。18 は口縁端部を丸く折り曲げる V-3-a、19 は皿 II-1-a、外底に墨書「林置」を記す。20 は口縁部を鋭角に折り曲げ、外面口縁下に櫛で波状文を施す。滑石製石鍋 21 は底部、22 は口縁部の破片である。須恵器 23・25 は杯蓋、23 は器高が高く、25 は扁平である。24 は杯、底部に断面四角の高台が付く。26 は皿である。27・28 は焼塙壺片で、内面に布目、外面には指頭圧痕が残る。29 は平瓦で、凸面は格子目叩き、凹面には布目が残る。木製品 30～35 は箸で、30～32 は完存し、30 が全長 24.0cm・幅 0.5mm、31 が 21.8cm・0.5cm、32 が 21.2cm・幅 0.5mm を測る。36 は小型の下駄で、台は小判形を呈し、台と齒を一本から作り出す。径 6mm の鼻緒孔を穿つ。他に獸骨が出土している (図版 4-2～4)。

Pit 出土遺物 (第 25 図) **Pit21 青磁** 1 は外面にヘラによる条線、内面にはヘラと櫛による文様を施す同安窯系 III-1-b、2 は内面の施文が櫛のみの III-1-a 底部片、3 は瓦質土器鉢、**Pit16 白磁** 4 は外面に櫛文を施す小碗底部片、外底に墨書「黃口」を記す。5 は皿 III 類である。**Pit24・25 6・7** は底部ヘラ切り離しの土師器小皿である。**Pit40** 8 は瓦器梗、9 は单弁蓮華文軒丸瓦、**Pit53** 10 はヘラ切りの土師器小皿、11 は白磁碗 V-1、12 は白磁高足杯で、杯部外面に蓮弁文をヘラ彫りする。

SX21 出土遺物 (第 25 図) 14・15 は土師器 小皿、底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底は



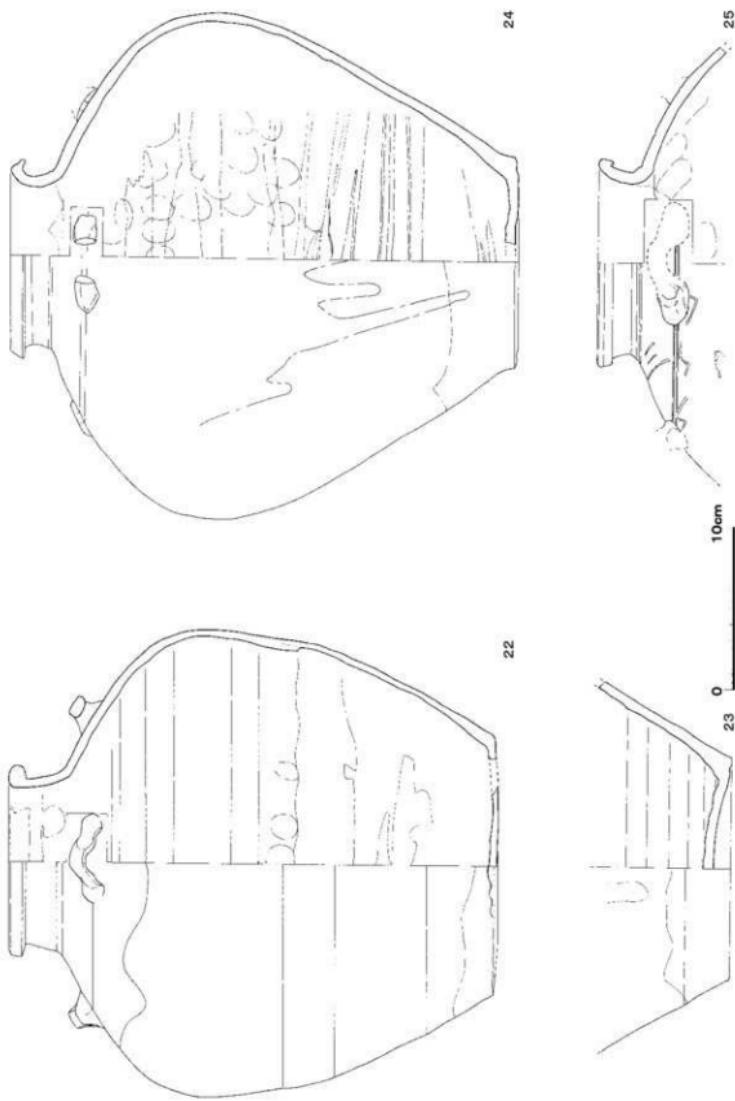
第19図 SK20出土遺物実測図 1 (縮尺 1/3)



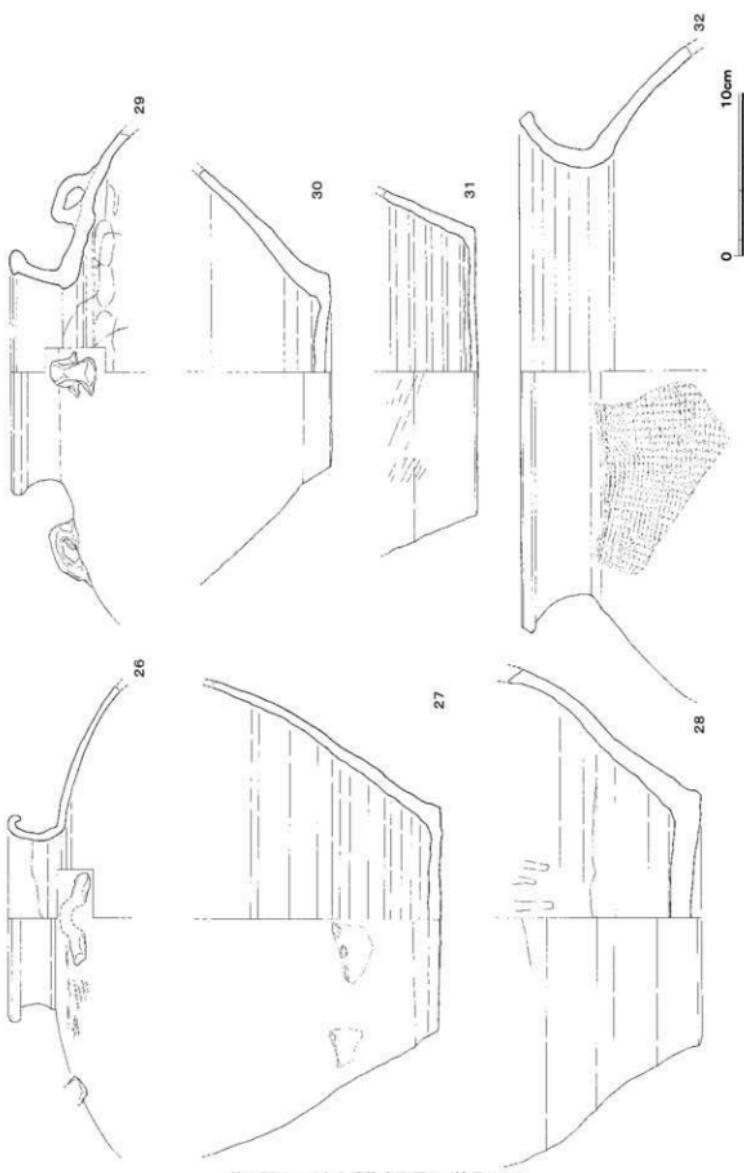
第20図 SK20出土遺物実測図 2 (縮尺 1/3)

ナデ、外底には板状圧痕が残る。口径 8.2・8.9cm、器高 1.2・1.3cm を測る。16 は龍泉窯系青磁碗 I-6 で、口縁部を直に引き出す。体部外面に蓮弁を片彫りし、蓮弁内に櫛目を縦に入れる。体部内面は蓮華切枝文を片彫りする。

A-1-B-I/I 層出土遺物 (第25・26図) 第25図 13 は移動式竈焚口底片、1 は土師器丸底杯で、底部はヘラ切り、板状圧痕が残る。体部外面上半は回転横ナデ、下半には指頭圧痕が残る。内面はコテ当てにより平滑に仕上げられる。2 は瓦器椀で、体部外面から内面にかけてヘラ磨きを施し、高台を貼り付けた底部は回転横ナデを施す。3 は黒色土器小皿で、底部はヘラ切り離し、体部外面から内面にかけてヘラ磨きを施す。4 は内黒土器椀、口縁部は消失し、体部外面から高台内にかけて回転横ナデ、内面はヘラ磨きを施す。5 は瓦質土器、口縁部が内側にし字に折れる。6 は緑釉陶器碗底部片、7 は器種不明の陶器頸部片で、内外面とも緑釉が掛ける。8 は無釉の高麗陶器甕口縁部片で、上位は水平に引き出され、端部は上下に拡張する。外面に波状の凹線をめぐらす。9・10 は須恵器杯蓋、弥生土器 11 はS字状口縁台付甕、12 は二重口縁壺の口縁部片である。白磁 瓢 13 はII-1、14 はIV-1-a、15~18 は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。15・18 は無文のV-3-aで、15 は内底に沈線状の段が付く。

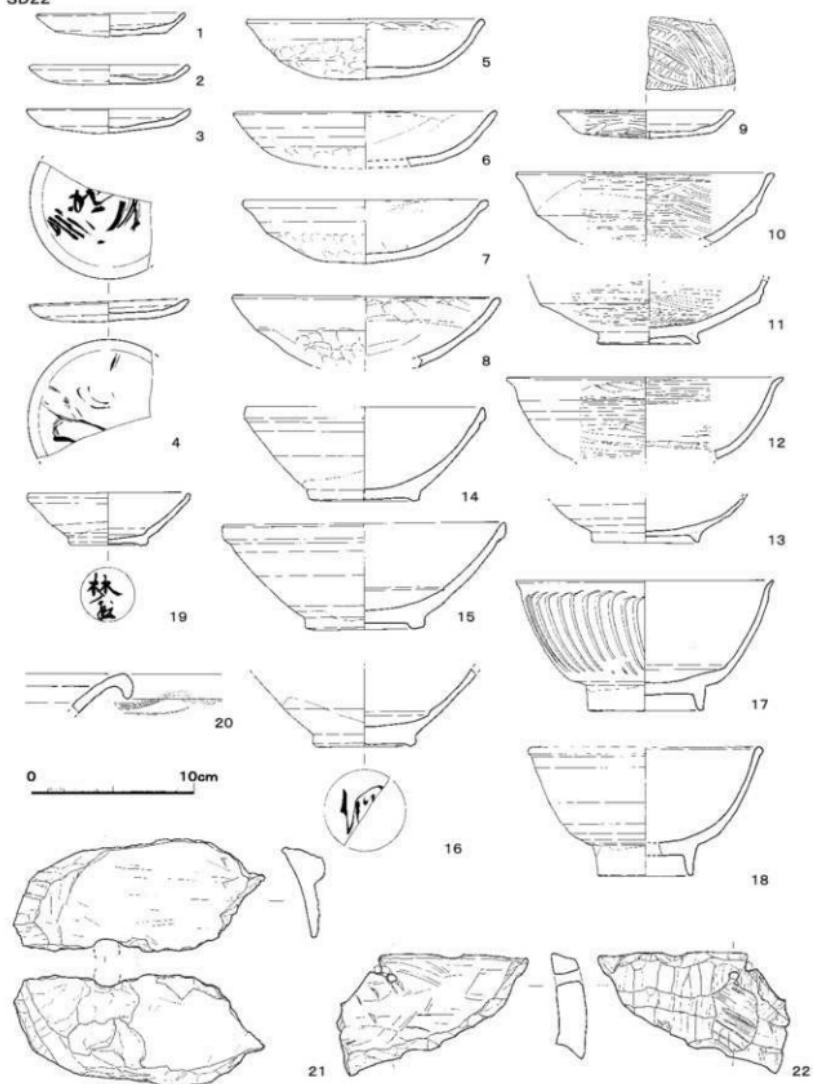


第21図 SK20出土遺物実測図3（縮尺 1/3）

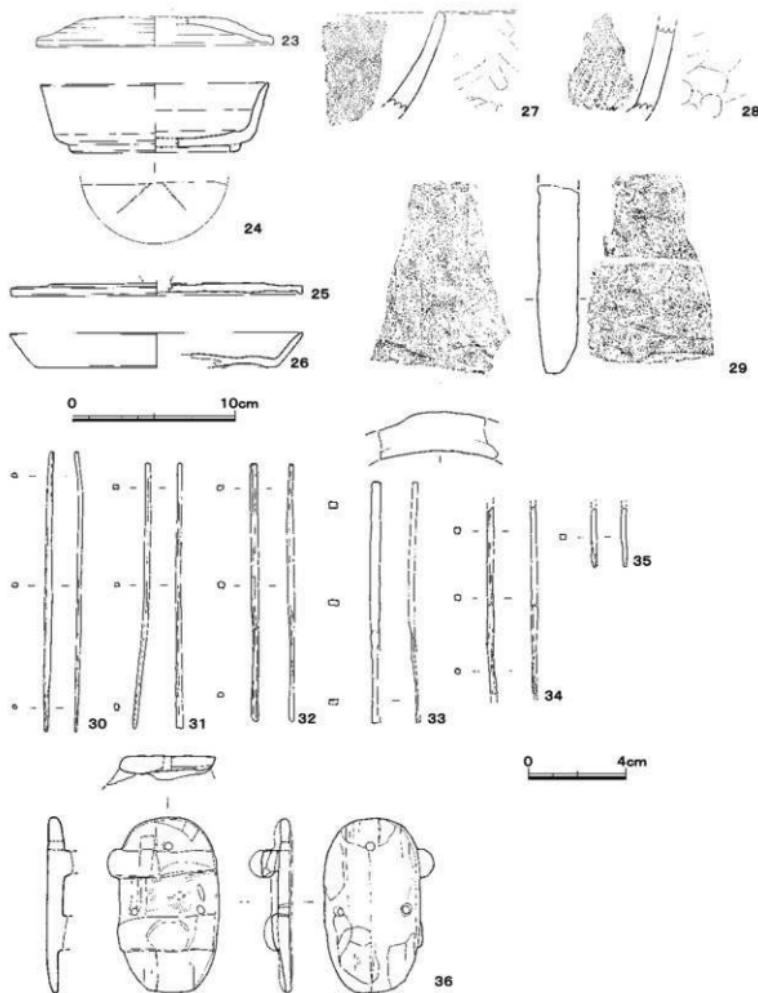


第22図 SK20出土遺物実測図4（縮尺 1/3）

SD22



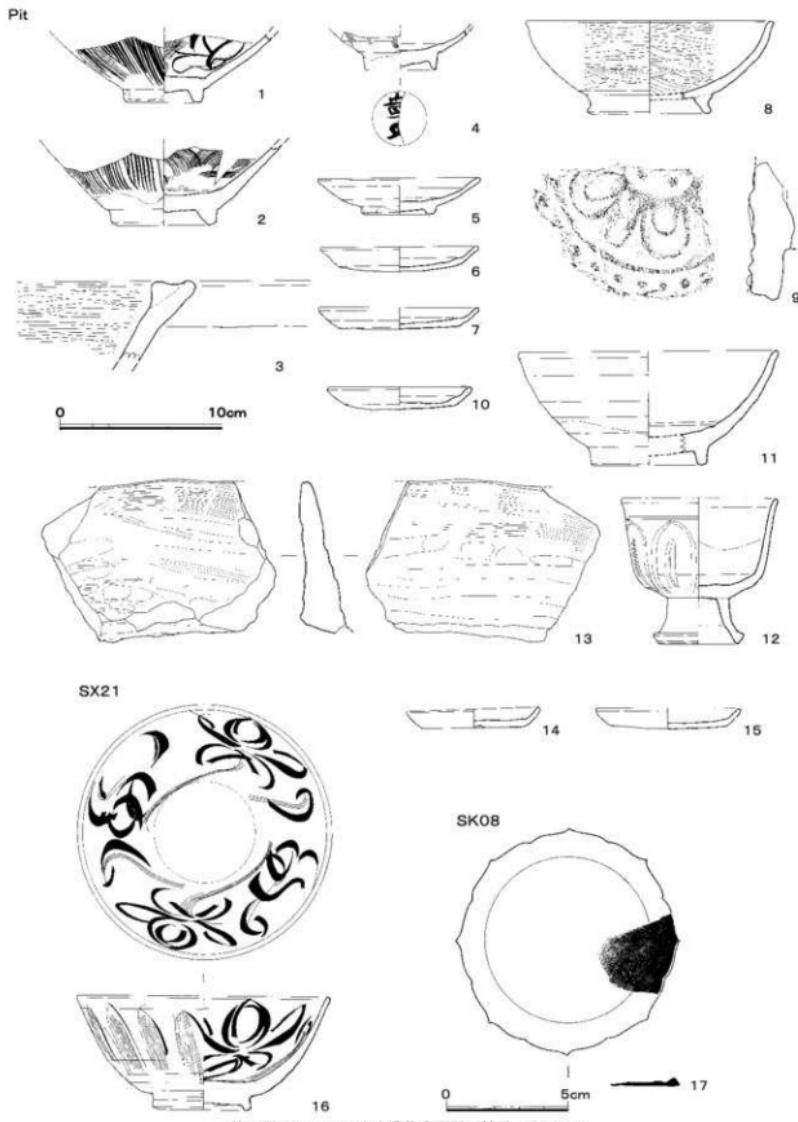
第23図 SD22出土遺物実測図 1 (縮尺 1/3)



第24図 SD22出土遺物実測図2 (縮尺 1/3)

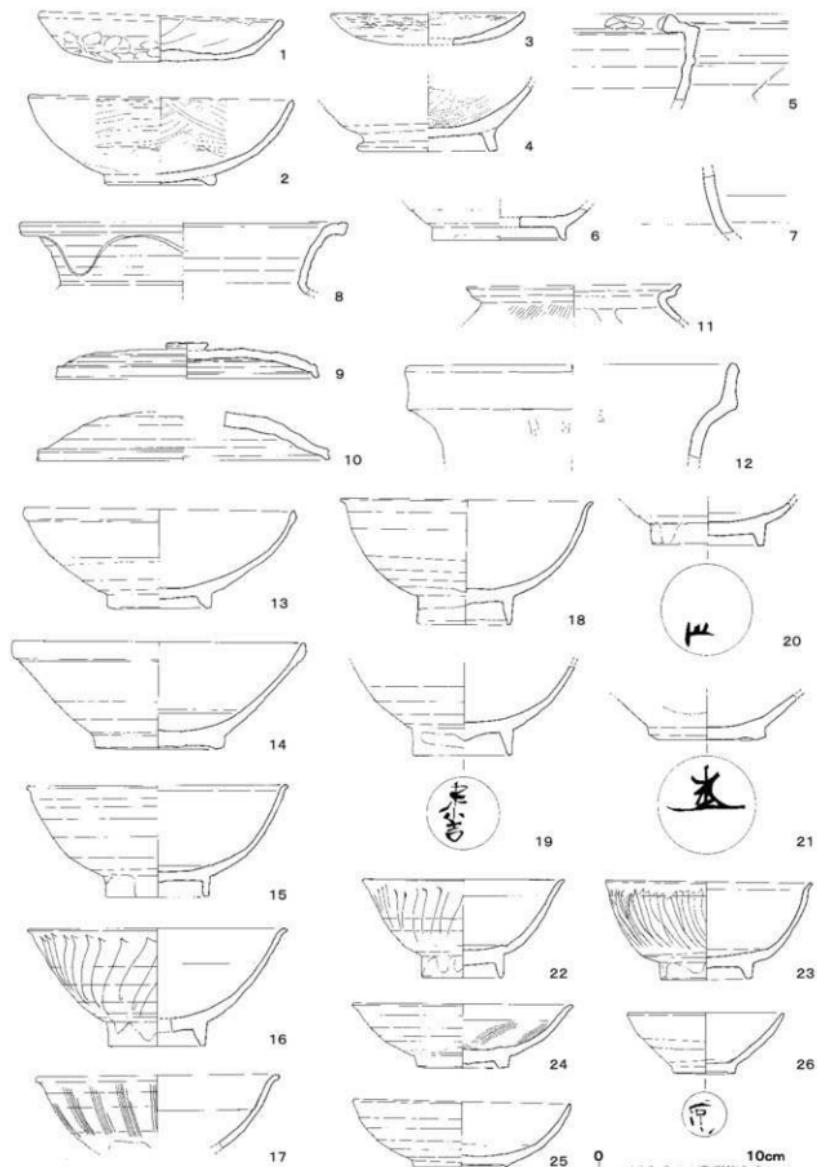
19は18と同型の下半部で、外底に墨書「口小吉」を記す。16・17は体部外面に条線を入れるV-3-bで、16はヘラ、17は櫛による。20はV類、21はIV類の底部片で、外底に墨書が記される。小碗 口縁部が外反し、体部外面にヘラによる条線が入る。22はV-2-b、23は口縁端部を丸くし、底径が大きい。軸下に化粧土が掛かる。24は高台付皿VI-1-b、25は皿VII-1-a、26は皿II-1-aで外底に墨書を記す。

A-2-B-2/I層出土遺物 (第27~32図) 土師器 1~5は小皿で、底部の切り離しは2がヘラ、他は糸

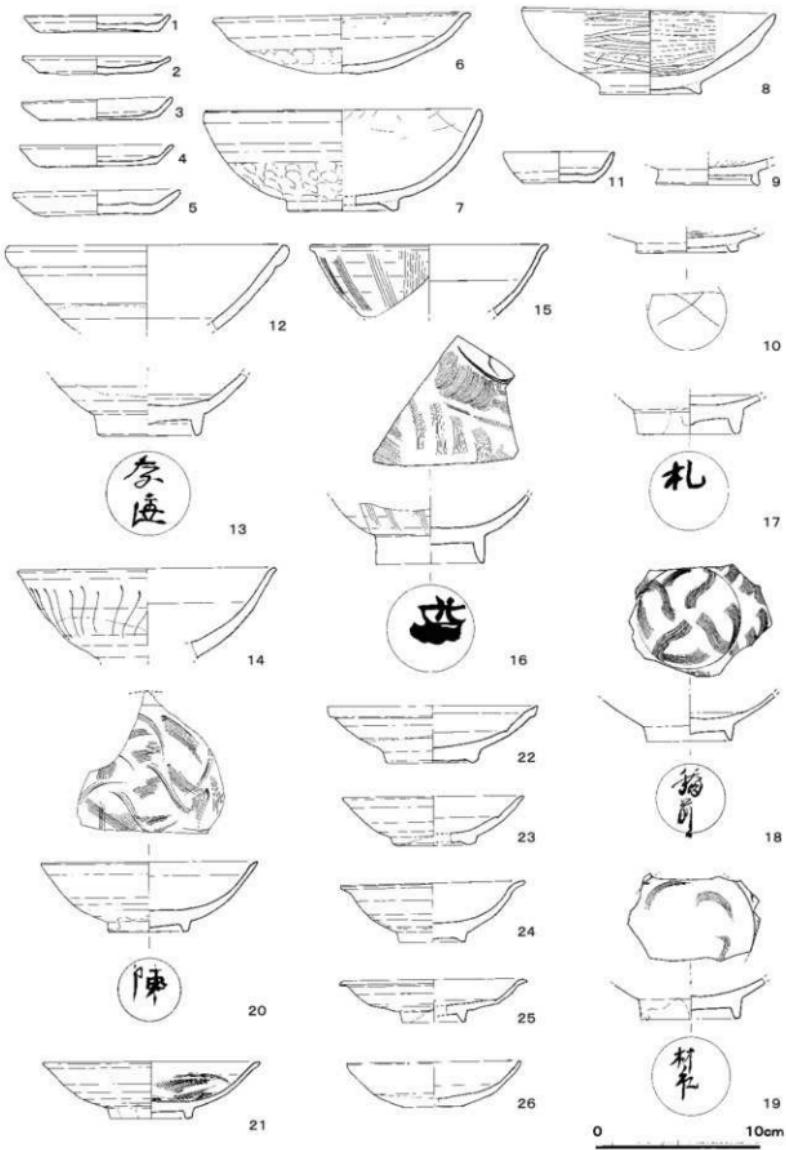


による。6は丸底杯、11は特小皿である。7~10は瓦器碗で、10は外底に線刻がある。白磁 碗 12はIV-1-a、13・17はV-1で外底に墨書を記す。14・15はV-2-bである。16はV-4-b、18・19はV-4-bで、外底に墨書を記す。20・21は高台付皿VI-1-bで、20の外底には墨書「陳」を記す。皿 22・23はII-1-aで、23は口縁端部を上方につまみ出す。24・25は高台がII類より細く、高い。26はVI-1-aである。27~31は黒釉陶器 碗で、27・29は倒笠形で、口縁部が外反する。28は体部が直線的で、口縁部を電口にする。32は青磁 皿底部片で、内底は露胎で、印花文を施す。青白磁 33は小壺の蓋、34・35は身である。36~38は合子の身で、36・37は体部外面に型造りにより花弁文を施す。38は無文で、蓋受け部に蓋の破片が溶着する。39は特小皿である。陶器 40・41は鉢VI類、42は小皿、43~45は行平で、注口の上半を3~5方向、把手は断面八角形に面取りし、上面に径0.4cmの穿孔がある。46は甕の頸部で、外面に柳で波状文を施す。47は盤で、口縁部が欠失する。48は小型の長瓶の下半、49は無釉の水注X類で、口縁部を盤状にする。50・51は瓦質土器鉢で、50は口縁部を丸く折り曲げ、体部外面は横ナデ、内面の上位は横方向のヘラ磨き、下位は暗文を入れる。51は体部下位から底部にかけての破片で、体部は内外面とも横方向のヘラ磨き、内底に暗文を入れ、外底は未調整である。陶器 52~76は緻密な胎土の盤II類で、口縁部を断面四角形に折り曲げる。底部は円盤状を呈し、やや上げ底である。内底には印花文を施す。青磁 龍泉窯系碗、77はI-4-b、78は見込みに花文を片彫りする底部片で、外底に墨書を記す。79は青白磁 水注蓋、80は陶器行平の取っ手、81は越州窯系青磁水注の取っ手である。土製品 82は断面三角形、やや反った棒状の土製品で、両端は欠失する。長軸方向にナデ成形する。83は片面に布目が残る。84は瓦玉、85は半折の有孔土錐、86・87は管状土錐である。石製品 88~92は滑石製品、88は石鍋体部片の再加工品で、幅1~2mmの断面V字の溝を刻む。89は石鍋底部片、92は縦耳が付く口縁部片である。90・91は縦耳が付く石鍋のミニチュアである。93は器表を平滑に仕上げた乳鉢、94紡錘形の投弾、95は磨石で、石材が花崗岩で、一端が欠失し、残存部位には研磨・擦痕が残る。96は石材が玄武岩、径4cm前後の断面円形の棒状で、両端が欠失し、研磨・擦痕が残る。乳棒か。陶器 四耳壺 いわゆる底部を欠失し、101~105は頸部と胸部の境がやや不明瞭で、頸部は短く内傾し直線的に延びる。口縁端部は外に断面三角形に引き出す。101は肩部より上、103・104は体部下半以下を欠失する。なだらかな肩部に回線をめぐらせ、横耳を貼り付け、肩部から体部下半にかけて柳で縱方向の条線を入れる。106~108は頸部と胸部の境に断面三角形の凸線をめぐらせ、肩部に波状の回線をめぐらせ、横耳を貼り付ける。体部下半以下を欠失する。106・107は口縁端部を外に断面三角形に引き出し、108は口縁部を水平に折り曲げる。109は頸部が直立し、口端端部を丸く折り曲げ、水平に引き出す。肩部上位には回線をめぐらせ横耳を貼り付け、その下位に波状の回線をめぐらす。110は頸部が短く直立し、口縁部を玉縁にする。頸部以上の破片である。111は須恵器 蓋の擬宝珠形模み、112は弥生土器 蔵で、口縁部に穿孔する。土製品 113は断面三角形の棒状土製品で、ヘラ削りの後にナデ調整し、平滑に仕上げ、角は斜め方向にヘラ削りし、面取りする。両端は欠失し、端部に向て細くなる。114・115は管状土錐、116は瓦玉である。石製品 117は滑石製石鍋片を再加工した径4.8cm、厚さ1.2cmの円盤状石製品、118は長方形硯の海部角の破片で、裏面中央を削り取り、外縁を脚部状にする。

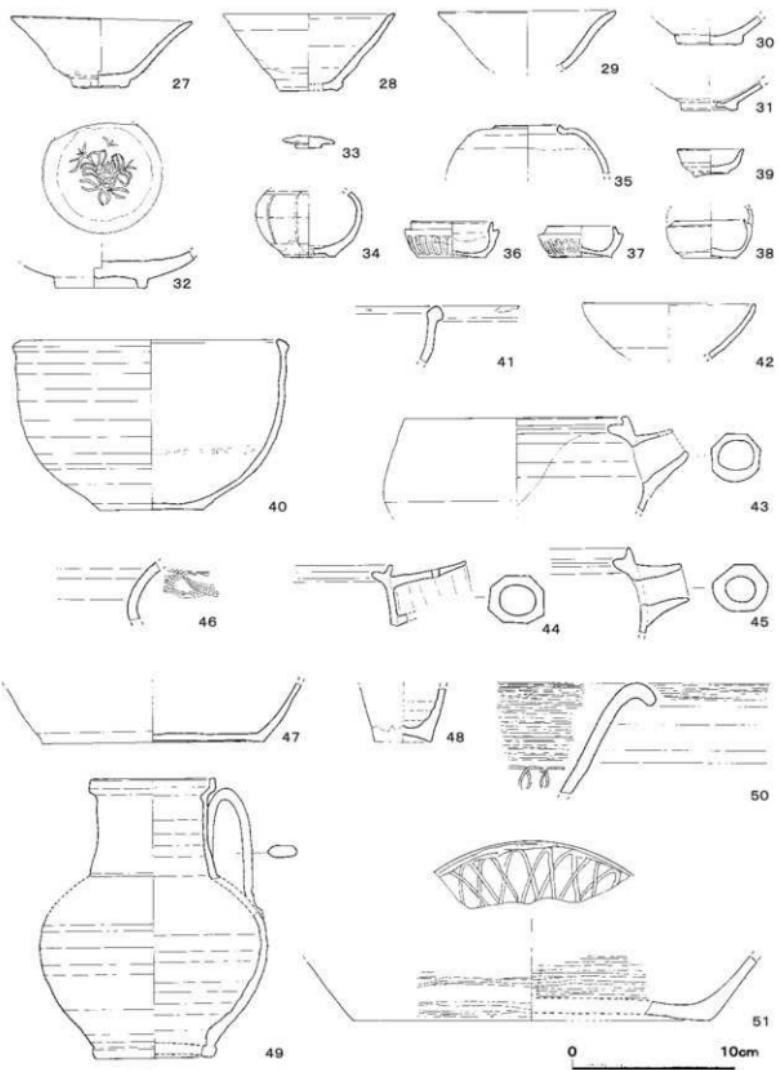
A-1・B-1/II層出土遺物 (第33図) 8世紀以前の遺物が多く出土した。中世前半の遺物は混入、上面で未検出の遺構に伴うものである。土師器 底部(天井部)の切り離しはヘラによる。1は小皿蓋で、口縁端部下面のやや内側に回線状の窪みをめぐらせる。体部は回転横ナデ、天井部内面はナデを施す。2は小皿で、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。3・4は丸底杯で、体部外面上半は回転横ナデ、下半には指頭圧痕が残る。内面はコテ当てにより平滑に仕上げられる。5は内黒



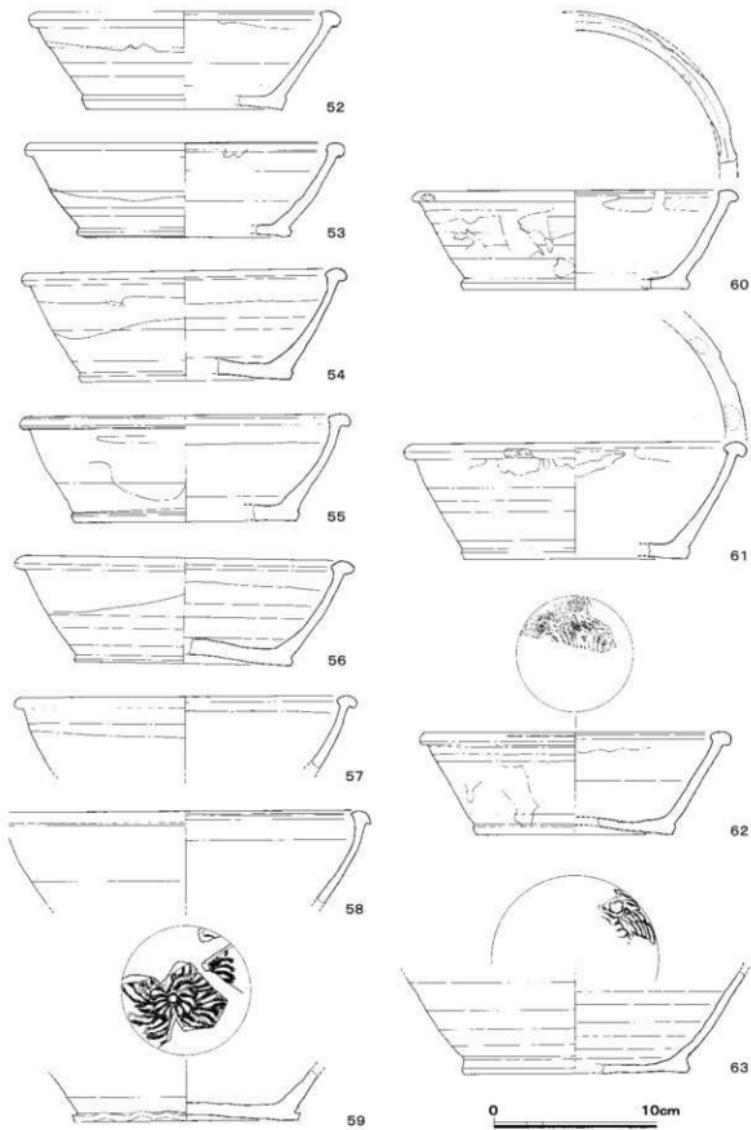
第26図 包含層出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)



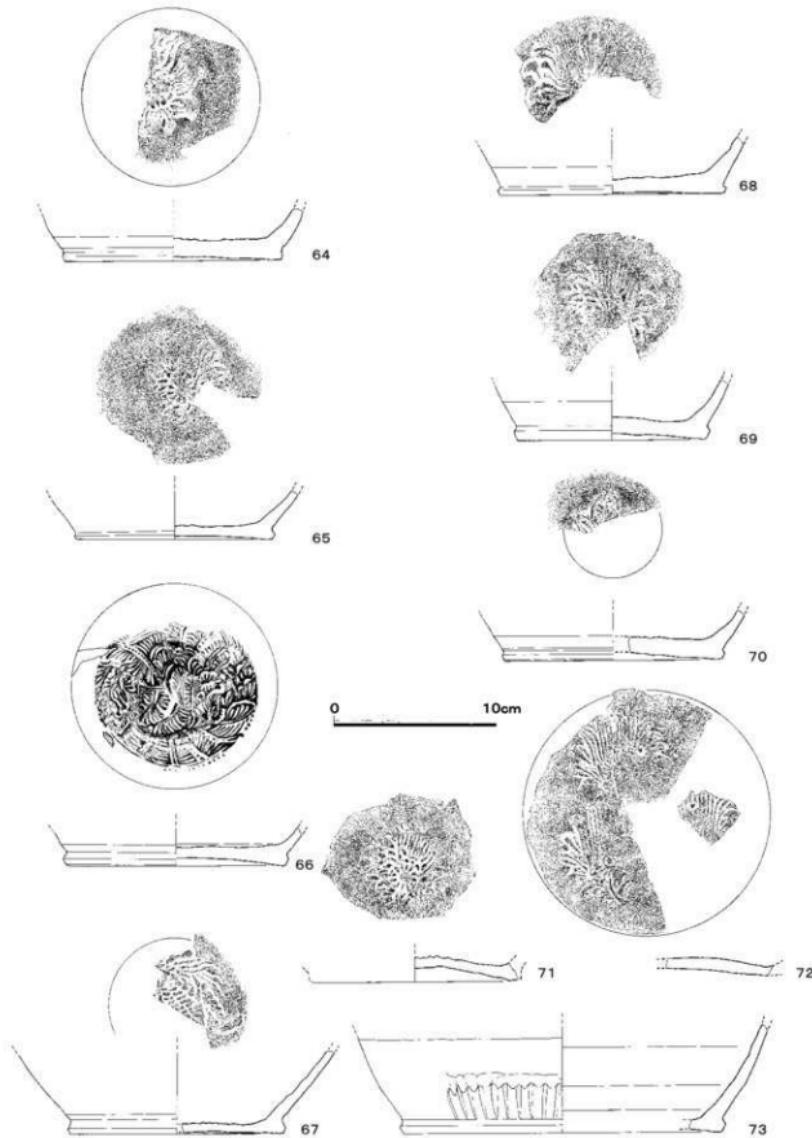
第27図 包含層出土遺物実測図 2 (縮尺 1/3)



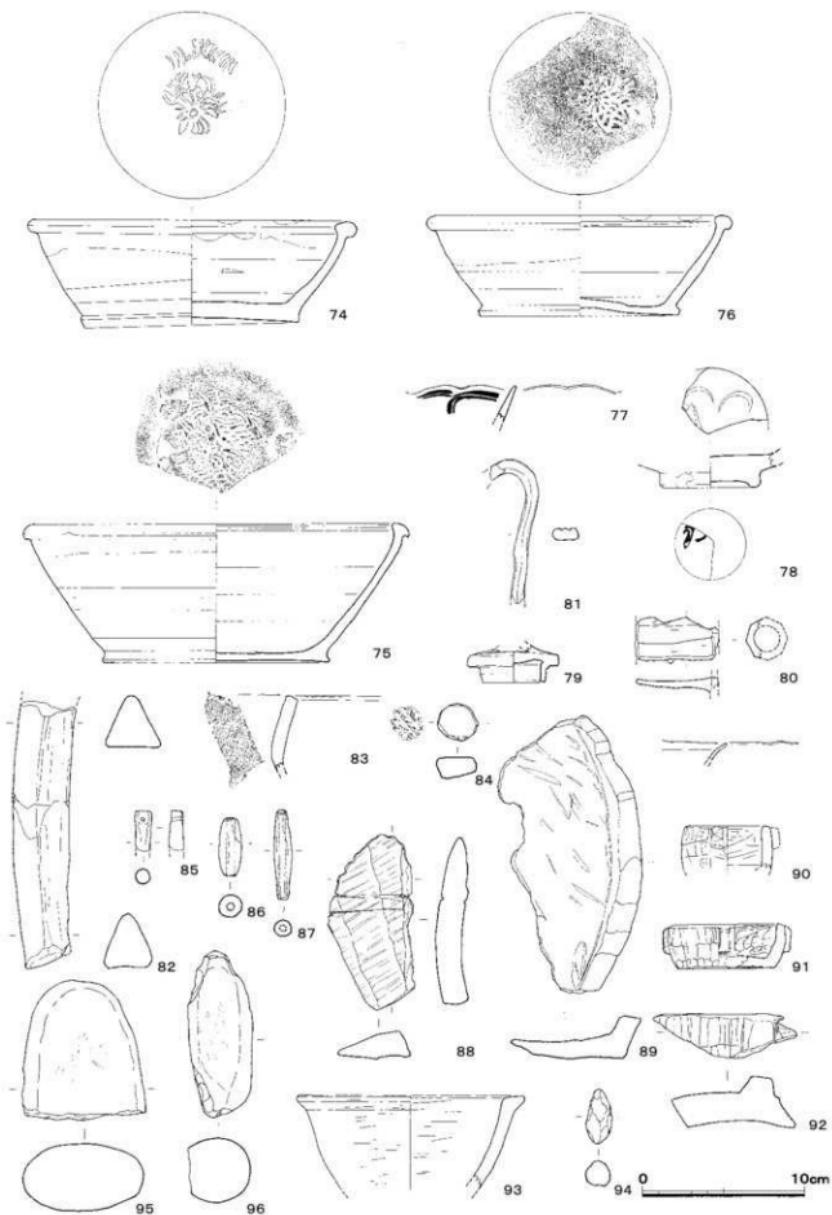
第28図 包含層出土遺物実測図3 (縮尺 1/3)



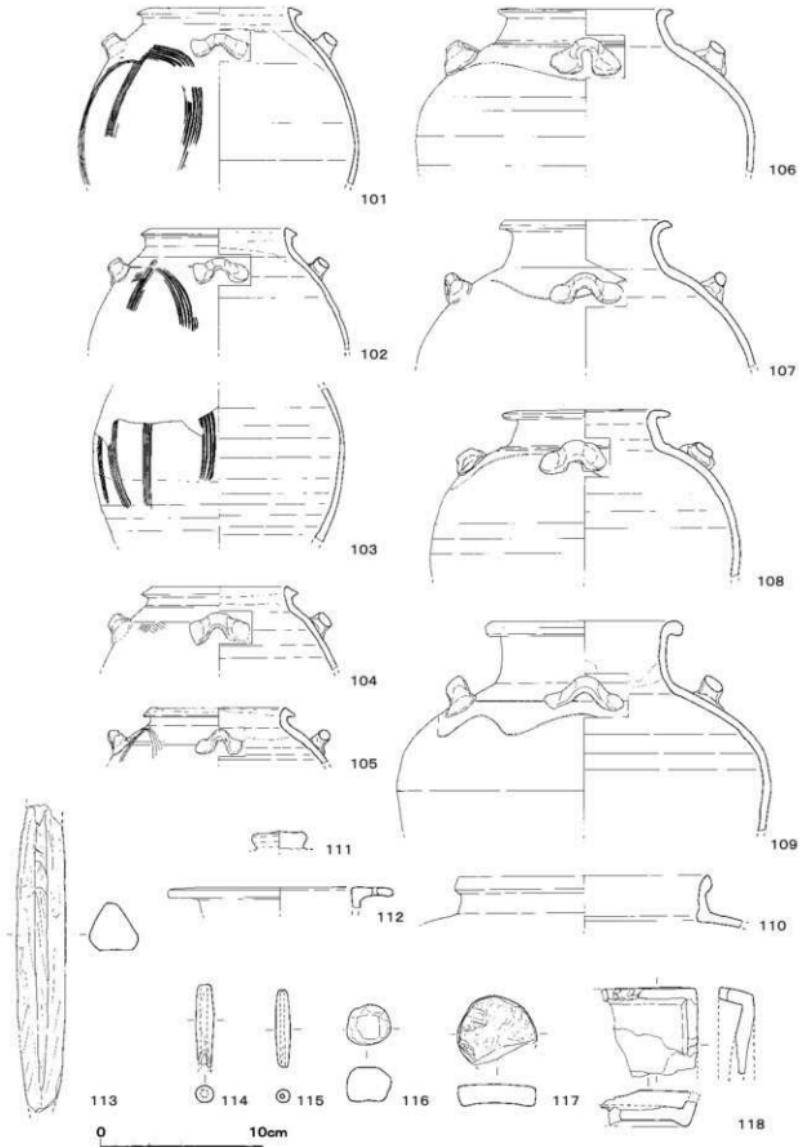
第29図 包含層出土遺物実測図 4 (縮尺 1/3)



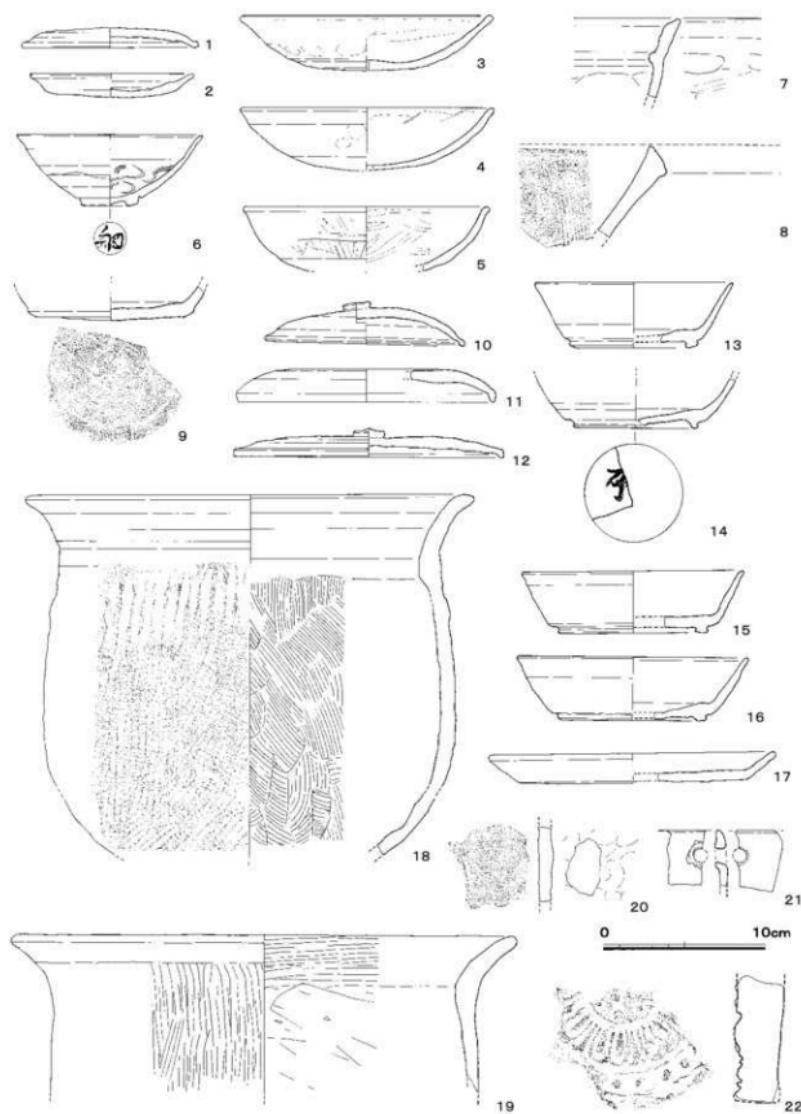
第30図 包含層出土遺物実測図 5 (縮尺 1/3)



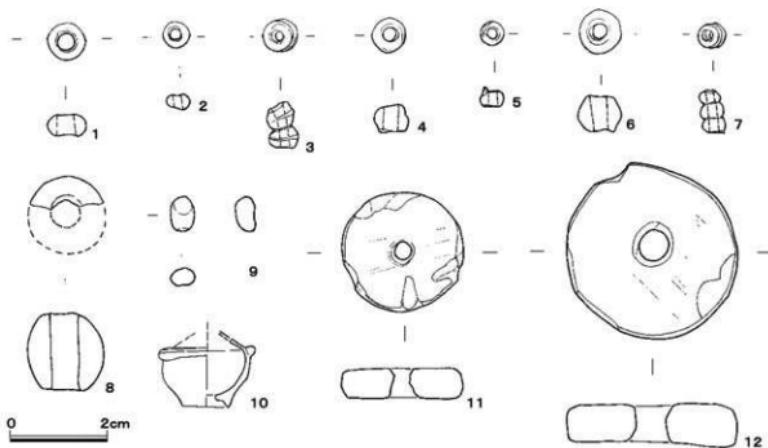
第31図 包含層出土遺物実測図 6 (縮尺 1/3)



第32図 包含層出土遺物実測図 7 (縮尺 1/3)



第33図 包含層出土遺物実測図 8 (縮尺 1/3)



第34図 ガラス製品他実測図（縮尺 1/1）

土器 碗で、底部が欠失し、体部外面は回転横ナデ、内面はヘラ磨きを施す。6は連江窯青磁 小碗で、内面に花文を片彫りし、外底に墨書「綱」を記す。7は陶器こね鉢、8は備前陶器ナリ鉢口縁部片である。以下8世紀以前の遺物である。土師器9は杯底部片、18は製塙土器、19は甕、20は焼塙甕、21はイイダコ壺である。須恵器10～12は杯蓋、13～16は杯、17は皿で、14の外底には墨書を記す。22は鴻臚館式軒丸瓦で、瓦当が1/4残存する。

ガラス製品他（第34図）1～7はガラス小玉で、ガラス棒を高熱で熔かし鉄の棒に巻き付けて作る。1はSK07出土、青色透明、2～4はSK22出土、2は青色透明、3はガラス小玉2個が溶着したもので、青色透明、5はA-2 I層出土、青色透明、6はB-1 I層出土、青色透明、7はB-2 I層出土、ガラス小玉3個が溶着したもので、青色透明、8は復元径1.5cmのガラス玉で、A-1 I層出土、藍色透明を呈する。9はガラス粒子で、SK10出土、藍色を呈する。10はガラス製小壺蓋で、吹きガラスで形成された球体にガラス紐を巻き付け錠とする。頂部は欠失しているが、他の類例から撮みが付いていたとみられる。残存する高さ15mm、錠を除く胴径18mmを測る。底部には吹き竿を外した跡とみられる径4mmの小孔、その外周に7mmの段がある。乳白色透明を呈し、B-2 I層出土である。11は石製、12は土製の鋸鍊車である。

◆参考文献

井上曉子「古代～中世東アジアにおけるガラス製品の流通と受容—吹きガラス製容器を中心に—」 2014

IV 小 結

博多遺跡群は中世前半において大陸からの物資の門戸として、宋商人が居留し、交易船から積み下ろされた物資の大集散地とされる。遺構や包含層から出土する膨大な量の宋代の陶磁器は、博多が交易の拠点であった物的証拠とされる。

宋商たちが構えた店舗や倉庫について明確にそれと断定できる遺構は検出されていないが、これまでの発掘調査では第 56・79・209 次調査など陶磁器が大量に廃棄された遺構が多く検出されている。本調査においても、土坑の他、包含層から 11 世紀後半から 12 世紀後半にかけての中国陶磁片が多量に出土し、その内の陶器 壺・鉢・盤片は完形に近い残存率で数個体分を復元することができた。膨大な破片の仕分け・接合作業の結果、壺は型式が多種多様にみられたのに対し、盤Ⅲ類は型式が同一のものが多くみられた（第 29～31 図）。出土した陶磁器は二次的な被熱により器面がただれているものは少なく、火災に遭って破損したものを廃棄したのではない。陶器についてはこね鉢を除いて使用痕が明瞭に残るもののが少なく、そのほとんどは荷下ろした積荷を開梱した際に、梱包に用いた緩衝材が不十分であったためか運搬の過程で破損した品を取り除き廃棄したものと推測される。粗製の壺は液体等の内容物が商品としてもたらされたものが大半であろうが、容器そのものが博多周辺に流通したものも多い。盤についても壺と同様に内容物を商品とする例もあるが、盤Ⅲ類は内底の広い範囲に印花文の装飾を施していることから、それ自体は碗や皿と同様に食器としてもたらされたのであろう。本調査では盤Ⅲ類は図化したもので 25 点、その他接合できない破片も出土している。博多周辺では農村集落の田村遺跡（福岡市早良区）で底部片の出土例があるが、全般的に出土例が少ない。大宰府においても出土例は少なく、器種分類に例示されている実測図でさえ体部中位、底部中央を欠いたものである。他に廃棄されたとみられる器器の碗・皿は陶器類に比べると、量的には及ばない。

本調査地の北東 80m に位置する第 209 次調査と同様、ガラス玉生産に関する遺物も多く出土した。坩埚とみられる無釉の陶器水注 X 類（第 28 図 49）の他、ガラス棒を高熱で熔かし金属製の棒に巻き付けガラス玉を作る工程で複数のガラス玉が溶着したものがあった（第 34 図 3・7）。

流通・生産に関する遺物が多く出土しているが、それらのほとんどは廃棄されたものである。本調査地で地山と見なしている黄白色砂層上面の標高が 2.2～2.5m と砂丘内ではやや低い標高に位置し、廃棄土坑が多く検出されていることから、不衛生で居住には適さない立地であったと推定され、用途については、作業場、建物が構えられていたとして倉庫や工房などに限られよう。

◆参考文献

- 博多 一高速鉄道関係調査（1）—福岡市埋蔵文化財調査報告書第 105 集 1984
- 博多 34 一博多遺跡群第 56 次発掘調査報告—福岡市埋蔵文化財調査報告書第 326 集 1993
- 博多 50 一博多遺跡群第 79 次調査の概要—福岡市埋蔵文化財調査報告書第 447 集 1996
- 博多 166 一博多遺跡群第 209 次発掘調査報告—福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1395 集 2020
- 田村遺跡V 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 192 集 1988



1. II層上面全景(北西から)



2. SE05井戸(北から)



3. SK07土坑(東から)



4. SK08土坑(北から)



5. SK03土坑(南東から)



1. SK06土坑(南西から)



2. SK02土坑(北西から)



3. SK18土坑(北から)



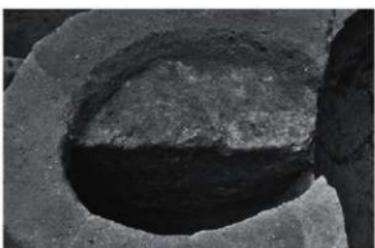
4. SK13土坑(北西から)



5. SK17土坑(北西から)



6. SK03土坑土層(南東から)



7. Pit25土層(西から)



8. SK10土坑(北東から)

図版3



1. SE05井戸土層(南西から)

2. 博物館実習生見学



3. II層下面全景(北西から)



4. SK20土坑(北西から)



5. SK12土坑(西から)



1. SK01瓦組土坑（南西から）



2. SD22ウマ下顎骨出土状況



3. SD22シカ肩甲骨出土状況



4. SD22ウマ頭蓋骨出土状況



5. SX21木棺墓（南から）



6. II区（西から）

報告書抄録

| ふりがな | はかた 172 | | | | | | | |
|--------------------------------|---|-------|------------|-------------|--------------|----------------------------|------------------------|------|
| 書名 | 博多 172 | | | | | | | |
| 副書名 | 博多遺跡群第220次調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第1415集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 佐藤一郎 | | | | | | | |
| 編集機関 | 福岡市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2021年(令和3年)3月25日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面積 m ² | 発掘原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| はかたいせきぐん 博多遺跡群 (第220次調査) | ふくおかにほかせきぐん はかたいせきぐん 福岡市博多区 冷泉町9番1号 | 40132 | 121 | 33° 35' 43" | 130° 24' 39" | 20180508 ~20180807 | 186 m ² | 記録保存 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 博多遺跡群 | 集落 | 古代・中世 | 井戸・土坑・溝・墳墓 | | | 土器類・須恵器・陶磁器・石製品・金属製品・ガラス製品 | | |
| 要約 | 土坑の他、包含層から11世紀後半から12世紀後半にかけての中国陶磁片が大量に出土し、陶器壺・鉢・盤片は完形に近い残存率で数個体分を復元することができた。そのほとんどは荷下ろしした積荷を開梱した際に、梱包に用いた緩衝材が不十分であったためか運搬の過程で破損した品を取り除き廃棄したものと推測される。 ガラス玉生産に関する遺物も多く出土しており、坩埚とみられる無釉の陶器水注、ガラス棒を高熱で熔かし金属製の棒に巻き付けガラス玉を作工程で複数のガラス玉が溶着したものがあった。 流通・生産に関する遺物が多く出土しているが、それらのほとんどは廃棄されたものである。本調査地で地山と見なしている層上面の標高が2.2~2.5mと砂丘内ではやや低い標高に位置し、廃棄土坑が多く検出されていることから、不衛生で居住には適さない立地であったと推定され、用途については作業場、建物が構えられていたとして倉庫や工房などに限られよう。 | | | | | | | |

博多 172

— 博多遺跡群第 220 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1415 集

2021 年(令和3年)3月25日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1

印刷 みやざき印刷

福岡市早良区相原14-19